御国の福音

私達の時代と２１世紀へのメッセージ！

何百万という人達が、自分達が「福音」だと信じているものを聞いた事があると思っています。しかし、彼らは、イエス・キリストに「関する」福音を聞いた事があるというだけで、実際にイエス・キリストがもたらされた福音を聞いたわけではありません！イエス・キリストは「神の国の福音」を説くために来られましたが、イエスが説いた「内容」を知っている人は殆どいません！この事は、衝撃的に聞こえ、また信じがたく思われるかもしれませんが、何百万というキリスト教徒達が、真の福音をいまだかって聞いた事がないのです！

ガーナー・テッド・アームストロング**著者**

多くの人にとって、福音の言葉は大昔の話です。有名な賛美歌の歌詞「昔、昔の話をして下さい（Tell Me The Old, Old Story）」というように、何か昔の、古代の出来事です。ラジオやテレビの牧師、あるいは地元の教会の神父から「福音」を聞いていると信じている人々は、繰り返し「イエスとその愛」について聞かされています。彼らは、二千年以上も前に起こった、何かとても昔の話を聞いているのだと思っています。

このイエスに関する「昔、昔の話」が「福音」だと思っている人がたくさんいます。しかし、驚かれるでしょうが、何百万という人達が真の福音をいまだかつて聞いた事がありません！信じがたいかもしれませんが、これは事実なのです。

福音とは、単にイエス・キリストの死と復活のお話なのではなく、イエス・キリストがもたらされたメッセージでもあるのです。イエス・キリストが説かれた福音は、現在や近い将来に関わる事なのです。福音という言葉自体、それは次の世紀の世界やその先の未来に関する記述といった様な、先見的なメッセージを伝えるものなのです。

真の福音には、地上の人類が直面する最も難しい疑問への答えが含まれています。それは、私達は誰なのか？私達は何なのか？なぜ私達はここにいるのか？私達は

老化してゆく身体の内に存在する意識ある「魂」で、身体が死んだ後も「魂」は意識を持って生きるのだろうか？私達は、多くの「魂」が天国や地獄に送られる一方で、日々この世に多くの「魂」を誕生させている「魂の工場」で暮らしているのだろうか？という疑問です。

神とは、悪魔が「地獄」に堕ちた魂を小躍りして迎える一方、聖ペトロが「天国の門」でやってくる魂を忙しく迎える間、「天国」のどこかでただ待っている様な、計画を始動させただけの「不在地主」のような存在なのでしょうか？

真の福音は人生の最も難解な疑問に答えています。イエスのメッセージは、私達がいかに肉体から魂へ変化し得るか、いかに魂へ生まれ変わるか、いかに地上の千年王国の期間をイエスと共に受け継ぎ、永遠の命という素晴らしい力を分かちあい、イエスと共に裁き、治める事が出来るか、という事を説明しています。皆さんがこれから読まれる事は真実です。ご自身の聖書で疑いの余地なく証明されています。

「悔い改めよ。天の王国は間近かである！」（マタイによる福音書４章１７節）とイエス・キリストは言われました。他の三つの福音を記したマルコ、ルカ、ヨハネは、いずれも神の王国という表現を使っています。「ヨハネ（洗礼者）が捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の国の福音を説き言われました。時は満ち、神の王国は間近かである。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコによる福音書１章１５節）

こうした言葉には、地球規模の世紀を超えた予言的なメッセージ、つまり、現代や近い将来へのメッセージが含まれています。これは、何百万ものキリスト教徒が理解していない事です。キリストの福音は「私（イエス）についての福音」ではなく、神の王国の福音とされていた事に注目して下さい。

英語の福音という言葉は、大部分の辞書から削除され、英語という言語から消え去ってしまったも同然です。「キリストを受入れた」と思い、「イエスを信じる」多くの人々はその言葉の本当の意味を全くわかっていません。英語の福音という言葉には様々な「宗教的」な暗示があります。先に記したように、福音で何よりも強調されているのは、イエス・キリストに関する話です。「福音を聞く」ために福音主義のキャンペーンや復活礼拝に行く人々は、戦争や戦争の噂、干ばつ、飢饉、地震、疫病、または

天から地上へ火を降らせるという偉大な偽預言者に関するメッセージなどではなく、イエス・キリストについて聞く事を期待しています。

人々は「それが真実です」という意味を込めて「兄弟よ、それが福音です」と口にします。イエスが説かれた真のメッセージを決して聞く事のない「福音」教会では、キリスト教徒の生き方、愛、喜び、平和、信仰、その他聖書のテーマに関する何百もの説教が行われています。「福音（ゴスペル）」音楽は、多くのスターや、カルテット、家族グループが歌う数十億ドル規模の巨大産業となっています。

無数のキリスト教徒が生涯教会へ通い、聖書を共に詠唱し、祈り、聖歌を歌い、「使徒信条」を暗唱する洗礼に参加したり、説教を聞いています。しかし、彼らは、大いなる苦難の激動期や主の日に関する、世界中の国々の運命については殆ど聞いていません。イエス・キリストが述べられた恐ろしい光景は、人気のある説教のテーマではありません。なので、殆どの牧師は預言を避け、愛、喜び、平和という三つの恩恵や様々な宗教哲学に関する説教を行う事を好んでいます。

キリストは確かに愛について話されました。許しと謙遜について話されました。私達がしてほしいと思う事を他の人にもするべきであるという「黄金律」を人類に与えて下さいました。しかし、キリストは、ご自身の来たるべき王国についても絶えず言及されました。それは、イエスの死からの復活や、大規模な戦争、干ばつ、飢饉、破滅的な大地震、天の兆しや想像を超える疫病が地上の民を揺るがす事に関するメッセージです。イエスのメッセージは、イエスが神の輝きと力と栄光とともに地上へ戻られる、すなわちこの世の神に反する政府を倒して地上に素晴らしい王国をつくられ、ついには世界平和をもたらされるというメッセージでした。

福音（gospel）という言葉は、ふたつのアングロ・サクソンの言葉を起源としています。「good（グッド）」と「spell（スペル）」、ドイツ語では spiel（スピエル）という言葉から来ており、「good news（良い知らせ）」を意味します。イエスのメッセージの要点を理解せずに、人々はイエスがもたらされたメッセージは無視して、その伝達者（メッセンジャー）に関心を向けてきました。例えば、ウェスタン・ユニオン（信用協同組合の一種）のメッセンジャーボーイがある家のチャイムを鳴らしたとします。彼はその家族へのメーセージを伝えようとしましたが、その家族はメッセンジャ

ーを歓喜にあふれて抱きしめました。どこで生まれたの？いくつ？好きな食べ物は？どんな髪型？良い子なの？優しくて親切なの？何を信じているの？お母様は如何？など、その家族は彼に関する事を全て知りたがりました。そして、彼が去った後、ドアに背を向け、彼が玄関先に落として行った電報には気付きませんでした。それから何年か経ってもその家族は、その昔彼らの家にやって来た「素晴らしいメッセンジャーボーイ」の話をし続けました。何百万ものキリスト教徒は、メッセンジャーのメッセージには気付かないまま彼を崇拝しています。イエス・キリストがもたらされた福音のメッセージを真に理解するためには、以下の点を理解しなければなりません。

（1）人として誕生する前、イエス・キリストは誰、もしくは何であられたのでしょうか？
（2）なぜイエス・キリストはこの世界に来られたのでしょうか？
（3）弟子達に伝えられたメッセージは何だったのでしょうか？
（4）一般の人々に対してなぜ謎めいた話（奥義）をされたのでしょう？
（5）なぜ亡くなったのでしょうか？
（6）復活なされたのでしょうか？
（7）どれくらいの期間埋葬されていたのでしょうか？
（8）現在、生きておられるのでしょうか？
（9）復活されて以降何をされているのでしょうか？
（１０） 地上に戻ってこられるのでしょうか？

上記の各質問は、回答されるべき非常に重要な質問です。それぞれが福音の主な要素に直接関わる事であり、イエス・キリストご自身によって語られています。

人として誕生する前、イエス・キリストは誰、もしくは何であられたのでしょうか？

この質問は最も重要な質問の一つであるだけでなく、この質問に答える事によって、神の言葉の根本的な真理の多くを理解する事が出来ます。神の律法は「無効」とされたのか、「旧約聖書は無効とされたのか」、「新たな契約」とはキリスト教徒が神の十戒に従う必要がないという意味なのか、安息日を守る事が求められているのか、という質問への答えです。

それでは、ヨハネによる福音書にある次の重要な節に注目して下さい。ゆっくりと注意深く読み、神の言葉を信じて下さい。

「すべてのものは彼によって創られた。創られた物で、彼によらずに創られた物はなかった。言葉は神[ギリシャ語でTheos（テオス）であり、ヘブライ語のエロヒムと同義]と共に在った。言葉は神であった。言葉は初めに神と共に在った。すべてのものは彼によって創られた。創られた物で、彼によらずに創られた物は無かった」（ヨハネによる福音書１章１～３節）

聖書で、初めに、という表現が使われているのは、ヨハネによる福音書１章１節と創世記１章１節の２箇所のみです。ここで、万物を創世された方と「話をし、言葉であった」方は、ナザレのイエス・キリストとなられた崇高たる神と同じ方だったと読み取れます。

さらに注目して下さい。「この方は世界におられ、世界はこの方によって創られたが、世界はこの方を知らなかった。この方はご自分の国（ユダヤ）に来られたが、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。しかし，この方を受け入れた人々，すなわち，その名を信じた人々には，神の子共となる特権をお与えになった。この人々は，血によってではなく，体の欲求や人の意欲によってでもなく，ただ，神によって生まれた[ギリシャ語でgennao(ゲンナオ)、「生じる」という意味]」「言葉は人となって，私達の間に住まわれた。（私達はこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である）、この方は恩恵と真実に満ちておられた」（ヨハネによる福音書１章１０～１４節）

これらの単純な言葉が他の何者でもない、イエス・キリストを指している事には全く議論の余地さえありません。その方は、「光あれ」、「乾いた地よ現れよ」、「我々にかたどり、人を創ろう」（創世記１章３、９、２６節）と言われた「言葉」あるいは神の代弁者でした。何世紀もの間、キリスト教徒は旧約聖書の神は父なる神であったと考えてきました。

彼らは、イエス・キリストがモーゼと預言者達の何世紀も後に地上に来られたのは、父なる神の古い律法を排除するためだと思っています。しかし、四つの福音書の一つである、ヨハネによる福音書の第１章の言葉で、イエス・キリストは創造をされた方と同

じ方であると明らかに証明されているのに、なぜ人々はこの様に思うのでしょう？それでは、
　この真実の示す論理的な結論とは何でしょう？

それは、イエス・キリストが人となられる前は、アブラハム、イサク、ヤコブに語りかけた方であり、ヤコブと格闘し彼に「イスラエル」という名を与えた方でもあり、また、燃える柴の中からモーゼに語りかけた方や、その指で十戒を記された方であるという事を何百億人と言う人が知らないと言う事です！その方は、イスラエルに古い契約を提案し、預言者達を感化され、律法を破ったイスラエルとユダを共に捕らわれの身とされた方なのです！

ご自身の聖書から、更なる証拠に注目して下さい。「神は、かつて預言者達を通じて、様々な時に、色々な形で先祖に語られましたが、この終わりの時代には、神の**御子**を通じて私達に語られました。神は、彼を万物の後継者と定め、また、彼を通じて世界を創造されました。彼は、神の栄光の光そのものであり、神の違いない本質の現れであって、万物を御自身の言葉の力により保ち、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました」（ヘブライ人への手紙１章１～３節）

ヘブライ人への手紙ではイエス・キリストが大祭司である事を強調しています。第１章では、後に続く１２章の導入部として、イエス・キリストを「全てのものは、その方のために、またその方によって」と称えています。では、いかにその方によって父なる神が全てのものを創造されたか、私達の救世主をあがめ称える素晴らしい言葉を、よりよい理解のために挿入した解説とともに読んでみましょう：

「**御子**は、天使達より優れた者となられました。天使達の名より優れた名を受け継がれたからです。神は天使のだれにも、あなたは私の子、私は今日、あなたを産んだ、と言われたり、更にまた、私は彼の父となり、彼は私の子となるだろう等と仰った事がありましたでしょうか？更にまた、神はその長子［聖母マリアから生まれられた、イエス・キリスト］をこの世界に送る時、神の天使達は皆、彼を礼拝せよ、と言われました。また、天使達に関しては、神は、その天使達を風とし、御自分に仕える者達［「召使」、天使の別の言い方で、人ではありません］を燃える炎とする、と言われ、一方、**御子**に向かっては、こう言われました。神よ［ギリシャ語でテオス］、あなたの

玉座は永遠に続き、また、正義の笏が御国の笏である。［イエス・キリストは地上を千年間統治されるでしょう（ヨハネの黙示録２章２６節、３章２１節、２０章４節）］あなたは正義を愛し、不法を憎んだ。それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの仲間に注ぐよりも多く、あなたに注いだ。また、主よ［イエス・キリストの事です］、あなたは初めに大地の基を据えた。もろもろの天は、あなたの手の業である」（ヘブライ人への手紙１章４～１０節）

ヨハネによる福音書第１章とヘブライ人への手紙第１章の意味に関して疑問の余地は全くありません。共に、人となられる前はエロヒムの神の仲間である、イエス・キリストが万物、この地球、そして地球上の全ての命の創造主であった事を示しています！

キリストの永遠の財産に注目して下さい。「これらのものはやがて滅びる。だが、あなたはいつまでも生きている。全てのものは、衣のように古び廃れる。そして、これらのものはあなたの着替える衣のように変わってしまうだろう。しかし、あなたは変わる事なく、あなたの年は尽きる事がない。神は天使のだれにも、私があなたの敵をあなたの足台とするまで、私の右に座っていなさい、と仰った事がありましたでしょうか？天使達は皆、救済の後継者達に奉仕する為に遣わされた神霊ではなかったでしょうか？」（ヘブライ人への手紙１章１１～１４節）

信仰深いキリスト教徒達がこうした単純であって尚底の深い真実を知っていれば、イエス・キリストについて全く異なった概念を抱くでしょう。彼らは、イエス・キリストがイスラエルに律法を授けた方なのだと認識し、イエス・キリストは、昨日も、今日も、また永遠に「変わる事のない」方（ヘブライ人への手紙１３章８節）であり、「変わる事がない」と言われた方（マラキ書３章６節参照）である、と理解するでしょう。これで、イエス・キリストが物理的な誕生、つまり人となる前に誰であったのかおわかりになったでしょうから、彼がなぜこの世に来られたのかを見てみましょう。

イエス・キリストはなぜこの世界に来られたのでしょうか？

何百億万という人々が救済の計画について頭を悩ませています。「なぜイエスは人の罪のために死ななければならなかったのか？」、「いかにして、たった一人の人間の死がこれほど多くの罪をあがなうことが出来るのか？」と人々は疑問に思っています。

まず、全能の神は自らを基にして命を誕生させている事を理解しなければなりません！創造はエデンの園で完了したのではなく、始まったのです！宇宙や私達の地球は、人の時の数え方では約５０億年前に創造されました。神（人の肉体という形でイエスになられた方）が地球を創造された際、神は美しく完璧な世界を創造され、ルシファーという大天使を神の創造物の上に立つ者として配置されました。

世界は植物が生り茂る緑豊かで、アダム以前の生命や宝石や貴金属が満ち溢れる素晴らしく美しい場所でした。神の言葉が、このアダム以前の世界をどのように表現され、そこで起こった事をどのように語られているか見てみましょう。

「さらに、主の言葉が私を訪れた。人の子よ、ツロの王に対して嘆きの歌を捧げ、彼に言いなさい。主なる神はこう言われる。あなたは知恵に満ち、美の極みである完全な印である。あなたは神の園エデンにあって、赤めのう（ルビー）、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉石、サファイヤ、エメラルド、カーバンクルといった、もろもろの宝石があなたを覆っていた。そしてあなたのタンバリンと笛は金でつくられ、あなたの創られた日に、あなたのために備えられました」（エゼキエル書２８章１１～１３節）

ここで、ツロの王は悪魔サタンとなったルシファーの一種として使われています。「あなたは知恵に満ち、美の極みである完全な印である」という表現は人間に対しては決して使われません。

「私はあなたを油で清められた守護者ケルブ（ケルビムの単数形）とともに、神の聖なる山に置いた。あなたは火の石の間を歩いていた。」（エゼキエル書２８章１４節）有名な「契約の箱（アーク）」において、神の玉座は、一対のケルビムが「慈愛の座」を覆う形で翼を広げたものだと描写されています。箱は神の玉座の象徴であり、一対のケルビムは神の座を囲む二つの聖霊を表しています。

「あなたの行いは、あなたが創られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だった」（エゼキエル書２８章１４,１５節）まさに事実は小説より奇なりです。殺人光線による宇宙での戦いや宇宙船が登場する宇宙帝国をテーマとした、星や惑星が爆発する、スターウォーズのような映画やテレビ番組を多くの人々が熱心に受け入れ

ているのに、大天使が世界を支配していた、おそらくは数十億年昔のアダム以前の創造に関する真実を理解している人は殆どいません。

しかし、ルシファーは自分に与えられた地上での位に満足しませんでした。神は天使の全体の３分の１を彼の支配下に置かれました。数え切れない年月、ルシファーは自身の考えを主張し納得させる為に、地上を「歩き回って」は対話や説得そして口論していました。ルシファーは自分には地球だけしかないのに、神は宇宙全体を統べていることが「公平」ではないと感じていました。

これについてのイザヤ書の記述に注目して下さい。

「暁の子、ルシファーよ。なんとまあ天から堕落してしまったことか。国々を打ち破った者よ！あなたはなんと地に落ちたことか。あなたは心の中で言った。私は天に昇ろう。神の星々の遥か上に私の王座を構え、北の果てにある（神々の）会合の山の上に座るとしよう。雲よりさらに上へ昇り、最も高き者と成ろう」（イザヤ書１４章１２～１４節）

ついにルシファーは自分の支配下の天使達を完全に堕落させる事に成功しました。ルシファーは天に昇り、神を倒そうと試みました。

次に注目して下さい。「あなたの商いが繁盛すると（「不正取引」、セールスマンや商売のようなもの）あなたのうちに暴虐が満ち、あなたは罪を犯した。そこで、私はあなたを汚れたものとして神の山から追い出そう。守護者ケルブよ、私はあなたを火の石の間から消滅させよう」（エゼキエル書２８章１６,１７節）「商いが繁盛する」というフレーズは、キング・ジェームス版（欽定訳）ではあいまいです。これは「多くの不正取引」という意味で、商売や販売を表しています。ルシファーが商売をしていたというのは、革新的な考えです。ブリンガーの必携聖書では、「１８節にあるように、販売イコール不正取引、またはそれに似た行動を意味し、道徳的観念から、それは中傷や悪口を言う者を意味します」（１１４６ページ）と書かれています。

ついに、ルシファーと彼の天使達が神を倒そうと試みる時が来ました。しかし、神は彼らを放り出され、サタンと彼の天使達は激しい憎しみと怒りで地上を破壊しました。

生命の存在しない、くぼみだらけの月が、無数の隕石や小惑星がその表面に激突した事を示しているように、天文学によって太陽系が大破した事が示されています。火星の生命の存在しない地表には岩が散乱し、金星は厚い有毒なガスで覆い隠され、地球より大きな木星では激しい嵐が渦巻いています。

聖書が生命のない、荒れ果てた地上の光景から始まっている事に注目して下さい。
地殻プレートや大陸は真っ黒な荒れ狂う海の下にあり、厚い雲に覆われていました。
「初めに、神（エロヒム：一人以上を指す）は天地を創造された。地は形なく（ヘブライ語でトフー：tohu、）虚空（ヘブライ語でボフー：bohu）であって（または、「となって」）、闇が深遠の表層にあり、神の聖霊が水面を動いていた。神は言われた。光あれ。こうして、光があった」（創世記１章１～３節）

ここで、地球が初めからヘブライ語のトフーとボフーで意味されるような「虚空の荒地」として創造されたのではないという聖書の証拠に注目して下さい。

「天を創造した主、すなわち神は仰せられました。地球を創られたのは神自身であり、これを良く興しました。これは無駄（トフー）に創られたのではなく、命の宿る場所として創られたのです。主はこう仰せられます。私こそが他でもない主である。」（イザヤ書４５章１８節）

ブリンガーのこの節に関するコメントは興味深いものです。「無駄とはトフーの事で、これは創世記１章２節の（形なく）という語と同じです。したがって、創世記１章２節が示しているように、これはトフーとなったに違いないのです。創世記１章１節に、「当時の世界」（ペトロの手紙２、３章６節）とあり、さらに２節では、それが廃墟となったとあります。それがいかにして、いつ、なぜ、どれくらい続いたのか、私達は知りません。地質学者がどれくらいの年月がかかったのかを解明するなら、おそらく創世記１章１節と２節の間とするでしょう。創世記１章２節から２章４節には、ペトロの手紙２の３章７節にある「今の天と地」とあります。双方共に、ペトロの手紙２の３章１３節にある「新しい天と新しい地」の対比となっています。（ブリンガーの必携聖書９８９ページ）

エゼキエル書２８章とイザヤ書１４章で描かれているルシファーが神を倒そうとして失敗に終わった出来事は全て、地上が美しく完璧に創造された時と、地上がトフー・

ボフー、つまり虚空の荒地、混沌となった時の間に起こりました。最初の完璧な創造と、創世記１章２節とそれに続く節で示されている地上の再創造との間には、現在の私達の時間の感覚でいう数十億年という膨大な時間がかかったのかもしれません。

イエス・キリストはご自身が人となる前の存在について度々言及されました。「アブラハムが生まれる前から、私はある」（ヨハネによる福音書８章５８節）と言われると、ユダヤ人は激怒しました。私達はキリストの言葉のみならず、「キリストそのものを信じる」でしょうか？弟子達が彼のもとに喜んで帰ってきて、キリストの名のもとに、悪魔達が彼らに屈服した、と言うと、キリストは彼らに言われました。「私は、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見た！」（ルカによる福音書１０章１８節）キリストは神と共にそこにおられたのですから、もちろんそれを見ておられました。お二人は、共にエロヒムであり、サタンが暴力的な反乱を企てた時に神の玉座におられました！あなたはキリストを信じますか？キリストは、サタンが稲妻のように、あるいは燃え上がる彗星のように天から地上に落ちるのをそこで見ていたと言われました！

人の創造の後、サタンはすぐにエデンの園に現れました。エゼキエル書２８章１３節にあるように、そこは、地上が大破する前にサタンが住んでいたのと基本的に同じ場所でした。しかし、サタンは木に巻きつくヘビとして現れたのではありませんでした。ヘブライ語でナハシュ（nachash）とは、「囁き魅惑する者」という意味で、姿形を表しているのではありません。

「父なる神」となった方とともにイエス・キリストとなった方は、初めから、人を神の家族の原型として創造する事を意図されました。「我々は、我々ににせて人を造ろう」（創世記１章２６節）とお互いに言われました。彼らはエデンの園に「命の木」と「善悪の知識」という木を置かれました。アダムとイヴはそこにある何百という木のどの木から食べても良いが、「善悪の知識の木」からは食べてはならないと言われました。（創世記２章９節）それらは本物の木だったのでしょうか？聖書ではそうだったとしています。多くの寓話が創造や「エデンの園のアダムとイヴ」の話をなぞって作られています。しかし、その邪悪な実がりんごだったという証拠はありません。また、男性の喉に見られる「喉仏」は実際には「アダムのりんご」ではありません。

最も有害な寓話の一つが、最初の罪は性交の罪だったというものです。しかし、神は「産めよ、増えよ、地に満ちよ」（創世記１章２８節）と言われているのですから、これは馬鹿げています。後に神は言われました。「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」（創世記２章２４節）神の言葉は結婚の意味を含んでいます。３番目と７番目の十戒は家族や家庭に関するもので、十番目の十戒も同様です。

アダムとイヴのもとに現れた生き物はケルブのようなものだったかもしれません。サタンとなったルシファーは、聖書では「大天使」とされる３人のうちのひとりでした。他の二人は、ミカエルとガブリエルです。神はあきらかに、それぞれの大天使に三分の一ずつ天使を割り当てられました。ケルビムやセラフィムに関しては、エゼキエル書１章、１０章とイザヤ書６章を学んで下さい。それぞれのケルビムは、人、鷲、獅子、雄牛という四つの形で現れています。

メキシコ、中米、南米、中東、中国、日本を含む多くの古代文明では、ケルビムやセルフィムの特徴を示す幻獣が神話にみられます。ピラミッドを守るスフィンクスは身体が獅子で頭が人です。鷲の羽根と獅子の爪と尻尾があり大きな人間の頭をした雄牛は、古代の都市や宮殿の壁の装飾として見られます。「翼を持つ飛ぶヘビ」は、メキシコや中米、南米の古代原住民の多くに崇拝され、「ケツァルコアトル」と呼ばれました。ケツァルは鳥で、コアトルは「ヘビ」を意味します。

どういう形で現れたにせよ、サタンはすぐにイブ誘惑し始めました。神は不公平だとほのめかしました。「ヘビ（ヘブライ語でナハシュ、「囁き魅惑する者」という意味）は主なる神が造られた野の生き物のうちで最も巧妙でした。蛇は女に言った。園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか？女は蛇に答えた。私達は園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央にある木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様は仰いました。蛇は女に言った。決して死ぬ事はない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる事を神はご存じなのだ。（創世記３章１～５節）

イヴは「ささやき魅惑する者」の説を聞き、禁じられた実を取りました。アダムも彼女に加わり、こうして最初の罪が犯されました。その罪とは複合的なものです。まず、彼らは唯一の親である神に背きました。「貪欲は偶像崇拝である」（コロサイの信徒への

手紙３章５節）とされているように、彼らは神への服従と自分達の間に禁じられた実を置く事で、その実を偶像としてしまいました。彼らは自分達のものではなく、明らかに禁じられていた、実を盗みました。彼らは「善悪を知る」ことを切望し、神のようになりたいと望んで悪魔の巧妙な説に耳を傾けました。

アダムとイヴは「人間性」を持つように創造されました。人間性とは、虚栄心、嫉妬、色欲、欲望からなる動機や感情、情熱が混合したものです。人の性質についてパウロはこう書いています。「肉体に従って歩む者は、肉体に属する事を考え、聖霊に従って歩む者は、聖霊に属する事を考えます。肉体的思考は死に繋がり、聖霊的思考は命と平穏に繋がります。なぜなら、肉体を重んじる者は、神に敵対しており、神の律法の対象ではなく、実際その対象と成り得ないのです。」（ローマの信徒への手紙８章５～７節）

肉体という言葉は「物理的」または「身体的」を意味したものです。アダムとイヴは、神がエデンの園に置かれた「命の木」からまだ食していなかったため、聖霊的思考者ではありませんでした。彼らは簡単にサタンに誘惑されてしまったのです。

パウロはコリントの教会へ書きました。「私は、神の情熱の如くあなたが羨ましい。なぜなら、私はあなたを純潔な処女として一人の夫、つまりイエスに献げたからです。ただ、イヴが蛇の悪だくみで欺かれたように、あなたの思いが汚されて、イエスに対する真心からそれてしまうのではないかと心配しています」（コリント人への第二の手紙１１章２～３節）

聖書は、アダムは「欺かれていない」と述べています。なぜなら、悪魔の説得を聞き入れ、禁じられた実を取ったのはイヴであり、彼女がそれを夫に与えたからです。アダムはただ素直に妻の決定に従ったのです。

パウロはテモテに語りました。「なぜなら、アダムが最初に創られ、それからイヴが創られたからです。アダムはだまされませんでしたが、彼女はだまされて、罪を犯してしまいました」（テモテへの第一の手紙２章１３,１４節）私達の最初の両親によって、最初の罪がこの世界にもたらされました。罪とは、神の法に背く事です。（ヨハネへの第一の手紙３章４節）

この最も重要な真実を記すにあたって、パウロは言いました。「このようなわけで、一人の人によって罪がこの世界にもたらされ、罪を通じて死がもたらされました。こうして、死が全ての人類に課せらる事となりました。これは全ての人が罪を犯したからです。律法（シナイで成文化された法）が与えられる前にも罪は存在したが、律法無くして、罪を問われる事はありません。しかし、アダムからモーゼに掛けて、アダムの罪と同じような罪を犯さなかった人達さえ、死は支配しました。その人（モーゼのことで、アダムではありません）は、来るべき方を前もって表す者だったのです」（ローマの信徒への手紙５章１２～１４節）

全能の神は完全です。神は完全な正義であり神聖な方です。神にはあらゆる力があります。神には創造され、破壊される力があります。最初の家族が悪魔の誘惑に屈するという罪を犯したから後、神は彼らが命の木から食べる事を許されませんでした。創世記第２章と３章を学んで下さい。罪を犯した後、アダムとイヴは自分達が裸である事に気付きました。以前は二人の幼子のように気にせず恥ずかしいとも思わなかったのに、今や裸である事が恥ずかしくなりました。

次の事項に注目して下さい。「こうして女が、その木は食べることが出来、魅力的で、人を賢くする望ましい物だと理解した時、彼女はその実を取って食べてしまい、一緒にいた夫にも手渡し、彼も食べてしまいました。二人の目は開け、自分達が裸である事を知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰巻とした。その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと彼の妻は、主なる神を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。どこにいるのだ？彼は答えたました。あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。私は裸ですから。神は言われた。お前が裸である事を誰が告げたのか？取って食べるなと命じた木から食べたのか？アダムは答えた。あなたが私と共にいるようにしてくださった女が、木から取ってくれたので、食べました。主なる神は女に向かって言われた。何という事をしたのか。女は答えた。蛇にそそのかれ、食べてしまいました。主なる神は、蛇に向かって言われた。このような事をしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、そして、お前の子孫と女の子孫の間に私は敵意を据える。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く。神は女に向かって言われた。お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め彼はお前を支配するだろう。

神はアダムに向かって言われた。お前は妻の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。お前のせいで、地は呪われたものとなった。お前は生涯そこから食べ物を得ようと苦しむだろう。それはお前に対して茨とあざみを生えいでさせ、お前はそこから野草を食べてることとなるだろう。お前は土に還るその日まで、食べ物を得るためにその顔を汗にまみれるだろう。お前は土から取り出されたので、お前は塵（ヘブライ語では「赤土」の意）であり、塵に返るのだ。」（創世記３章６～１９節）

神は、正義の父祖、預言者、使徒達に「彼女の子孫」とはキリストを指すという事を随分以前に明かされました。現代の聖書研究者はこの説を支持しています。「彼女の子孫」に関して、ハーレーは次のように書いています。「人間の堕落後すぐに、神は予言されました。それでも「彼女の子孫」によって人の創造は成功と証明されるだろう、と。これは来るべき救い主についての聖書の最初のヒントです。この聖書の冒頭での「彼」とは一人の人を意味し、イエスの到来を予感させ、ページを読み進むにつれ、その輝き、存在、記述はさらに明確かつ豊かになり、旧約聖書の終わりに至る頃には、キリストのイメージははっきりとしたものとなります。（ハーレー聖書ハンドブック６７ページ）

何世紀もの間、哲学者達は、神がなぜ人間を罪を犯さないように創られなかったのかと思い悩んできました。答えは簡単です。神は機械的な人間を創ろうとはされていません。神はご自身に似せて再現しておられるのです！神は神聖で正義、そして完璧な性格の持ち主です！性格を持つには選択の自由が不可欠です。自由な道徳的観念がなければなりません。

全能の神は、罪を犯す意思がないから、罪を犯されないのです！神は全能なので、神に罪を禁ずる事の出来る、より強い力など存在しません。しかし、神は自身を律しておられます。神は神聖で正しく聖なる性格を持った完璧な意思の力そのものであり、故に神は常に正しい選択をされるのです！

皆さんや私は選択をする生き物です。日々、私達はあれやこれをすべきかどうか選択し、神の律法に従って生きるかどうか葛藤し、間違いを犯した時は罪や弱さを悔い改め、神と神の正義の律法に背いて生きるかどうかの選択をしています。

神は人に選択を与えた事を明らかにしておられます。イスラエルに対して神は言われました。「私は今日、天と地をあなた達に対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。ですから、あなたとあなたの子孫が生き永らえるように、あなたは命を選びなさい」（申命記３０章１９節）神は私達の人としての経験は、二つの両極からなる事を明らかにされています。それは、生き方と死に方です。

生来、私達は死、そして罪に向かって歩みがちです。人の経験とは何でしょう？現在の全人類の在り様を見て、私達が求める理想郷の恵にどこまで近づけたのか問いてみて下さい。私達は人生から何を望みますか？私達は、健康、健全な心、強靭な身体、愛と理解、成功と財産を望みます。幸福な結婚、幸せで健康且つ素直な子供達、そして平和な社会を望みます。しかし、人は何を経験しますか？人は大抵、体調不良、病気、離婚、離別、見限り、中絶という形をとった幼児殺害、非嫡出子、身体障害、若者の間ですら多発する犯罪、麻薬乱用や麻薬中毒、殺人、脅迫、窃盗、精神病、戦争といった事を経験します。

なぜでしょうか？それは、虚栄心、嫉妬、色欲、強欲といった人間性のためです！

私達の最初の両親が罪深い状態で命の木から実を取らないように、神は彼らをエデンの園から追放されました！

初めから、神はアダムとイヴが罪を犯すだろうとご存知でした。神がなぜそれを未然に阻止されなかったのかと問う事は、今お話した根本的な真実を無視する事になります。しかし神は全人類の贖罪の計画も考えておられました。ヨハネは、神から送られた未来のビジョンを通じて、教会を象徴的な女性という形で見ました。それはイブと聖母マリアを暗喩的に表現したものです。

ヨハネは書いています。「そして、天に偉大な奇跡が現れました。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。（イスラエルの１２の部族を象徴しています）女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。また、もう一つの奇跡が天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。竜の尾は、天の星（天使の事です：ヨハネの黙示録１章１０節）の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ち

はだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖で全ての国々を治める事になっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。」（ヨハネの黙示録１２章１～５節）

この５節で、神はその時を越えた贖罪と救済の計画を明らかにされています。それは、サタンの反乱と、キリストの勝利、そしてキリストの王の中の王、神の中の神としての最終的な統治です。

イエス・キリストはこの世界に次の理由の為に来られました。

（１）ご自身が創造された、全人類の罪の為に苦しまれ亡くなるためです。イエス・キリストはあらゆる命の創造主であり、その一つの命は、残りの全人類の命以上に値します。
（２）未来の世界の統治者、王の中の王、神の中の神となる資格を得るため。
（３）現在の邪悪な世界の統治者、悪魔サタンの資格を奪うため。（コリント人への第二の手紙４章４節、ヨハネの黙示録１２章９節）
（４）弟子達を呼び集め教えを説き、彼らに福音を伝えるため。
（５）弟子を集め、ご自身の教会を建て（マタイによる福音書１６章１８節）、弟子にご自身のメッセージ、つまり福音を、世界中がその証人となるよう伝え広める為に。（マタイによる福音書２８章１８～２０節、ルカによる福音書２４章４４～４９章）
（６）全人類に、ご自身が生きたように生き、その歩みに続けという例を示されるため。
（７）救世主としてのイエスに関する旧約聖書の預言の多くを実現されるため。
（８）お墓の中で丁度三日三晩過ごした後に蘇り（マタイによる福音書１２章４０節）、多くの兄弟の中で長子となられるため。（ローマの信徒への手紙８章２９節）
（９）約束されたように聖霊を送り、ペンテコスト（聖霊降臨祭）の最初の日にご自身の真の教会を建てるため。イエス・キリストが、なぜこの世にナザレのつつましい大工として来られたのか、より多くの理由を探し集める事は容易に出来るでしょう。しかし、多くのキリスト教徒は、イエス・キリストは「世界を救う！」ために来られたと信じています。イエスはそのような事

はされていません！もし、イエスが世界を「救う」事を望まれたなら、そうされていたでしょう！しかし、イエスは当時、世界を救いにこられたのではありませんでした。イエス自身言われました。彼は群集に謎めいた言葉で話しかけたのだと。故に人々はイエスのメッセージを理解しませんでした。
（マタイによる福音書１３章１０～１７節）

なぜでしょう？それは、全能の神は、以下のような偉大な計画をたてておられ、その計画は神が定めた時間枠に沿って設計されているのです。神は、最終的に素晴らしく驚くべき目的のために御国で数十億の息子や娘に会われる事を望んでおられます！最終的には、多くの、いいえ、殆どの人類が救われるでしょう。

弟子達に伝えられたメッセージは何だったのでしょうか？

本書の冒頭でご覧になったように、イエス・キリストは「神の国の福音」を説きに来られたのであり、「キリスト教を始める」ために来られたのではありません！シナゴーグを再興されるために来られたのではありません。当時の世界を「救う」ために来られたのではありません！彼は上記の理由全ての為に来られたのであり、その中で最も重要だったのは、彼が父なる神から承り地上にもたらしたメッセージを弟子達に伝える事でした。

キリストは言われました。「あなた達については、言うべき事、裁くべき事がたくさんある。しかし、私をお遣わしになった方は真実であり、私はその方から聞いた事を、世界に向かって話している。彼らは、イエスが父(神様)について話しておられる事を悟らなかった。そこで、イエスは言われた。あなた達が『人の子』を崇める時、私が『彼』であると知るだろう。また、私が、自分勝手には何もせず、ただ、父(神様)に教えられたとおりに話している事が分かるだろう。私をお遣わしになった方は、私と共にいてくださる。私を一人にしてはおかれない。私は、いつもこの方の御心に適う事を行うからである。これらの事を語られた時、多くの人々がイエスを信じた。」
（ヨハネによる福音書８章２６～３０節）

何度も、イエス・キリストは父なる神がイエスを遣わされたと主張されました。父なる神がイエスにこの世に伝えるメッセージを与えられたとも言われました。「私は自分勝手に語ったのではなく、私をお遣わしになった父が、私の言うべき事、語るべ

き事をお命じになったのである。父の命令は永遠の命である事を、私は知っている。ですから、私が語る事は全て、父が私に仰られた事であり、私は語るのです。」（ヨハネによる福音書１２章４９、５０節）

キリストは常に来る御国について語られました。正義の預言者達、父祖達が御国に入る時、弟子達が１２の玉座に座り、イスラエルの部族を裁く時について語られました。

有名な最後の晩餐時、キリストの御国で「最も偉大な」弟子は誰なのか、と弟子の何人かが議論を始めました。イエスは彼らをたしなめ、異邦人の支配者達が「民に権力をふるった」という事を思い出させ、弟子達に奉仕者として謙虚であれと命ぜられました。そして、イエスは言われました。「あなたがたは、私が様々な試練に遭ったとき、絶えず私と一緒に踏みとどまってくれた。だから、私の父が私に与えて下さった様に、私もあなた方に王国を与えましょう。あなた方は、私の王国で私の食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治める事になる。」（ルカによる福音書２２章３０節）

イエス・キリストは地上の王座を受け継ぐように預言されていました。それは、父ダビデの王座です。弟子達はイエスがエルサレムの王座に上られ、ソロモンの時代の様に復興された王国を支配される事を望んでいました。ローマ占領軍を追放し、サンヘドリンを打倒し、神聖国家を樹立される事を望んでいました。

大天使ガブリエルが、聖母マリアに彼女が救世主の母となるだろうと告げた時、こう仰いました。「マリア、恐れる事はない。あなたは神の恩恵を授かる事となりました。あなたは身ごもって男の子を産みます。その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と呼ばれるでしょう。神である主は、彼に父ダビデの王座を与えるでしょう。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わる事がない」（ルカによる福音書１章３０～３３節）

「魂の不滅」に関する誤った教義と、死に際して「天国へ行く」という概念のために、何億万という人々が、イエス・キリストが鉄の杖でこの世を治めるために戻ってこられるという吉報、つまり真の福音を全く意識していません！

キリストはこの事実を「御国の奥義」によって説明されました。神の国がいかに地上を満たすかにについて、天の奥義で示されました。（マタイによる福音書１３章３３節）さらに、その値のつけようのない価値（マタイによる福音書１３章４４～６６節）、罪を悔い改める者達の存在、また、そうせずに追放される者達について語られました。（マタイによる福音書１３章４７～５０節）ある際立った訓話で、イエスはご自身を、王の位を授かり持ち帰るために遠い国へ旅立つ高貴な若者に例えられました。「そこで彼は、十人の僕を呼んで十ポンド（イギリスの通貨）の金を渡し、私が帰って来るまで、これで商売をしなさいと言った。しかし、国民は彼を憎んでいたので、使者を送り、我々はこの人を王にしたくないと、言わせた。さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕達を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。最初の者が進み出て、御主人様、あなたの一ポンドで十ポンドもうけました、と言った。主人は言った。良くやった優秀な僕よ。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。二番目の者が来て、御主人様、あなたの一ポンドで五ポンド稼ぎました、と言った。主人は、お前は五つの町を治めよ、と言った。そして、もう一人の僕が来て言いました。御主人様、これがあなたの一ポンドです。布に包んでしまっておきました。あなたはご自身が投資しなかった物さえ取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。主人は言った。たちの悪い僕め。その言葉ゆえにお前を裁こう。私が投資しなかった物さえ取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのだろう？ではなぜ、私の金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、私が帰った時、それを利息付きで受け取れたのに。そして、そばに立っていた人々に言った。その一ポンドをこの男から取り上げて、十ポンド持っている者に与えよ。（僕達が、御主人様、あの人は既に十ポンド持っていますと言った。）主人は言った。言っておくが、持っている者には皆更に与えられるが、持っていない者は、その所持品さえも取り上げられるのだ。しかし、私が王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、私の目の前で打ち殺せ」（ルカによる福音書１９章１２～２７節）

この素晴らしい訓話には、たくさんの例えが出てきます。高貴な若者はイエスの例えです。各僕は、来る御国をともに治めるために集められた者達の例えです。ポンドや合計金額は、それぞれの僕の天賦の才能や能力に応じて与えられています。人生で物事を乗り越える事の象徴である、熱心な努力によって所持金が１０倍に増えた者も

おり、また、才能が劣っていても、同等の努力によってそれを５倍に増やした者もいます。三番目の者は贈り物と贈り主に不快感を抱きます。彼が不快に思ったのは、それが自分のお金ではないからです！彼は、高貴な者、つまりキリストは、「蒔かないものも刈り取られ」、他人の労働から利益を得る、「厳しい人」だと不満を述べます！救いの象徴である無料の贈り物に感謝して、物事を乗り越える事の象徴である努力によって贈り物を増やすのではなく、それを受け取った時と同じ状態で「返す」為にお金を隠します。彼は何も生み出さず、成長もしなかったために、報酬と救いの両方を失います。

結果を出し乗り越えた二人が町を「治める」事となるというありのままの発言は、イエス・キリストが乗り越える者に民の支配者となる地位を約束されたという事実の例えなのです。

次の事に注目して下さい。「乗り越える者、そして、私の勤めを終わりまで守り続ける者に、私は諸国の民の上に立つ権威を授けよう。彼は鉄の杖をもって彼らを支配する、まるで土器を打ち砕く様に：同じように、私も父からその権威を受けたのである。」（ヨハネの黙示録２章２６、２７節）器を作った後にそれに欠陥があるとわかると、彼は器を投げつけて粉々に砕いてしまいます。

すねが鉄、足は一部が鉄と陶土で出来ている像が出てくるネブガドネザル王の夏のダニエルの解釈で同様の例えが使われている事に注目して下さい。

「見ておられると、一つの石が人の手によらずに切り出され、その像の鉄と陶土の足を打ち砕きました。鉄も陶土も、真鍮も銀も金も共に砕け、夏の脱穀場のもみ殻の様になり、風に吹き払われ、跡形もなくなりました。その像を打った石は大きな山となり、全土に広がったのです」（ダニエル書２章３４、３５節）

巨大な像は、古代バビロンから現在そして未来に至り世界を支配する異邦人の四つの帝国を象徴しています。金の頭はネブガドネザル王の帝国、銀の胸と腕はペルシア帝国、真鍮のおなかと腿はアレクサンダー大王のグレコ・マケドニア帝国、鉄と陶土が混ざったすねと足はローマ帝国と、歴史を通じて現代まで度々復活してきた帝国を表します。十本の足の指は、イエスの再臨によって忘却の淵に沈むであろう十カ国

の連合を象徴しています。（ヨハネの黙示録１７章１２～１４節、１９章１１～２１節）
エルはネブガドネザル王の夏を解釈しました。間違いなく、イエスが再来され、獣と呼ばれる十カ国の連合をいかに打ち砕かれるかに言及した部分に注目して下さい。
「この王達の時代に（像の１０本の足の指として描かれた１０人の王）、天の神は一つの国を興されます。この国は永遠に滅びる事なく、その主権は他の民の手に渡る事なく、全ての国を打ち滅ぼし、永遠に続きます。山から人の手によらず切り出された石（天から戻られた、イエスの象徴）が、鉄、真鍮、陶土、銀、金を打つのをあなたが御覧になったのと同様に、偉大な神は引き続き起こる事を王様にお知らせになったのです。この夏は確かであり、解釈も間違いございません。」（ダニエル書２章４４、４５節）

これは「宗教的」預言ではありません！核、化学・生物兵器で余る所なく武装し、２億５千万人という、米国をしのぐ経済、産業、軍事力を有する強大な勢力である「欧州連合」の形成と、そのような勢力がパレスチナを占領しているというニュースを皆さんが読まれたならば、それは「宗教的」な出来事を読んでいる事にはなりません！

キリストの福音は、マタイによる福音書２４章、マルコによる福音書１３章、そして、ルカによる福音書２１章にある、有名なオリーブ山の預言を、ヨハネの黙示録と合わせて読まれるとすぐにお分かりになるように、非常に預言的なものでした。

何億万という教会へ通うキリスト教徒は、イエス・キリストが予告された災禍、動乱、破滅的な出来事について何も知りません。彼らはいまだに「未来」に関するその揺るがぬ証拠や警告に無関心です。その「未来」が今の私達の時代と次世紀という近未来を指しているというのに！

これらの大きな出来事は「ここ」、つまり私達の地球上で、世界中の国々で近い将来起こるでしょう。イエス・キリストが弟子達に伝えられたメッセージとは何だったのでしょう？もちろん、それは四つの福音書に含まれています。現代の言葉で簡単に要約すると、イエスは地上に世界を統治する神の国を建てられると弟子達に言われました。イエス・キリストご自身が御国を治め、悔い改め神の聖霊を受け入れる者は皆その国に入る事が出来ると話されました。終末の強力な獣の力はイエス・キリストの

再来に抵抗するものの、イエスがいかに獣の力と偽の預言者を忘却の淵へ沈め、ついには戦争で荒廃したこの世に平和をもたらされるかを話されました。

弟子達はこうした事が自分達の生存中に起こる事を期待しました。イエス・キリストの復活後、天へ昇られる直前に彼らは尋ねました。「主よ、イスラエルに王国を建て直して下さるのは、この時ですか？イエスは言われた。父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなた方の知るところではない。しかし、あなた方の上に聖霊が降りると、あなた方は力を受ける。そして、あなた方はエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土、そして、地の果てにおいてまで、私の証人となるだろう。」（使途言行録１章６～８節）

弟子達はキリストのメッセージの世界規模の重要さに疑いを抱きませんでした。マタイによる福音書２４章を読み、ルカによる福音書２１章の同じ預言と比較してみて下さい。ここに幾つかの抜粋を紹介しましょう。

「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子達が近寄って来て、イエスに神殿の建物を見せたがりました。そこで、イエスは言われた。ここにある全ての物が見えますか？私は断言します。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残る事はない。イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子達がやって来て、ひそかに言った。仰って下さい。その事はいつ起こるのですか。また、あなたの来訪と現世の終わり（ギリシャ語では「時代」、地上の終わりではありません）には、どんな兆しがあるのですか？イエスはお答えになった。人に惑わされないように気をつけなさい。私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がキリストだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争の噂を聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。それらは起こる定めの事象であり、終末（時代の終わり、つまり、キリストの再来の時）を示すものではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や疫病（大規模な病気の流行）や地震が起こる。しかし、これらは全て産みの苦しみ（困難、大いなる艱難）の始まりである。」（マタイによる福音書２４章１～８節）

聖書に記録されているイエスの教えの殆どは弟子達にひそかに授けられました。神殿の大きな壁や柱、建物が地に崩れ落ちるだろうとイエスが言われた時、弟子達は驚き

ました。彼らは、人間の統制社会の時代の終わりを告げる兆しとは何か、また、地上を治める王の中の王としてイエスが来られる時の兆しが何であるのかを知りたがりました。

イエスがオリーブ山の預言を、ご自身の再来の約束も含む事から「この福音」と称され、どの様に表現なさったのかに注目して下さい。「その時、あなた方は苦しみを受け、殺される。また、私の名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。その時、多くの人が憤慨し、互いを裏切り、憎み合うようになる。偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。不法（無法、神の法の無視）がはびこるので、多くの人の愛がひえるでしょう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に説き伝えられる。それから、終末（時代の終わり、私達の知る形の文明の終わり）が来る。」（マタイによる福音書２４章９～１４節）

それは、大きな戦争や、何百万という人命の損失、大規模な「自然」災害、キリストの再来へと続く天の兆しを予告している事から、民への証であると同様に民に対する証でもあります。

何十年も、私は自問してきました。「干ばつのどこが「宗教的」なのだろう？飢饉のどこが「宗教的」なのだろう？」と。これらは、「宗教的な」予言ではなく、未だかつて無い、人命と人間の文明の悲惨で信じがたい破滅に関する広範囲に及ぶ世界規模の予言なのです。

それは、次世紀の初めという近未来に備える為の「今現在」のメッセージなのです！キリストの厳しい予言に注目して下さい。「その時、世界の初めから今にかけて、そして、今後も決して起こりえない程の大きな艱難が来るからである。神がその期間を縮めて下さらなければ、だれ一人救われない。（生存の事です！魂の救済ではなく、人命を救うという意味です）しかし、神は選ばれた人達のために、その期間を縮めて下さるであろう。」（マタイによる福音書２４章２１、２２節）

同じ時に関して、大天使がダニエルに伝えた預言をイエスの予言と比較して下さい。「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。そして、国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が訪れるだろう。しかしその時、あの書に名が記されているお前の民全ては救われるだろう。そして、地の塵の中に眠る多くの者が

目覚める。ある者は永遠の生命に、またある者は永久に続く恥と非難の的となる。」（ダニエル書１２章１、２節）

この預言における時間的要素はいったい何でしょう？それは、まさにキリストが話されたのと同じ時間を指しています。「かつて無かったほど」の事象が２回もありえませんし、もしそうであったら、お互いを否定しあってしまいます。このフレーズは、全世界史上最も重要で比類なき時の事を指しているのです。

このような言葉は、原子爆弾や水素爆弾が登場するまで理解されませんでした。しかし、現在人類は、地球の２０倍の規模のあらゆる生命を吹き飛ばす程の核爆弾を所有しています！ロシアだけで２万５千発の核弾頭を保有しています！多くの国々が、数百万人を殺傷しうる「ボツリヌス毒素」など広範囲に炭素菌を撒き散らす事の可能な破壊的な生物兵器を保有しています。多くの国々が、毒ガスなどの恐ろしい化学兵器を保有しています。サダム・フセインはこのような兵器を自国のクルド人に対して使用しました。湾岸戦争時には、化学兵器が火薬庫に備蓄されました。米国国防総省は、クウェート国境近くでこのような火薬庫が爆破され、化学物質に晒された米兵に様々なひどい障害がおきている事をついに認めました。

現在、Ｂ－５２爆撃機一機に、第二次世界大戦で両陣営が発射した爆弾の２倍以上の爆発力に匹敵する爆発物を搭載する事が出来ます。「ブーマー（多くの核弾頭付きの弾道ミサイルを搭載している事に由来する名）」と呼ばれる原子力潜水艦一隻で、第二次世界大戦で使われた全爆発物よりはるかに大きな威力の爆弾を発射する事が出来ます。

イエス・キリストは弟子達に感傷的な「宗教的」態度で聖人ぶったメッセージを伝えられたのではなく、やがて訪れる私達の知る文明の終わりと、キリストの統治者としての再来という形をとった世界を揺るがす**神の介入**に関するメッセージをお伝えになりました。

イエス・キリストがこの重大な出来事をどのように表現されたかに注目して下さい。「その時、『見よ、ここにメシアがいる』『いや、ここだ』と言う者がいても、信じてはならない。偽メシアや偽預言者が現れて、もし可能ならば（勿論不可能ですが）、選ばれた者達さえ騙してしまえる程の、大いなる啓示や不思議な業を行うでしょう。

あなた方には前もって言っておく。だから、誰かが『見よ、メシアは荒れ野にいる』と言っても、出て行ってはならない。また、『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはならない。なぜなら、「人の子」の来訪は、東より出でた稲妻が西まで光り輝く様に訪れるのだから。」（マタイによる福音書２４章２３～２７節）

現在でも、明らかに誤った噂を流す人がいます。稲妻という言葉は単に「明るさ」や「まぶしい輝き」を意味します。私達は、「雷と稲妻」を、雲が生み出す轟音がとどろく雷雨時の電気のまばゆい放出と結び付けて考えます。しかし、雷雨時、電気は地面から雲へ、雲から雲へ、あるいは雲から地面へ放出されます。私達が知る中で「東より出で」「西まで光り輝く」「明り」「輝き」または「きらめき」は太陽しかありません！

キリストは、人が見る事が出来ないほど眩く素晴らしい栄光で太陽の様に輝き、とてつもない力と栄誉を持って戻って来られます！

ヨハネが幻で見た栄光に輝かれるキリストをどの様に描写したかに注目して下さい。「その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、目はまるで燃え盛る炎、足は炉で精錬された真鍮の様に輝き、声は大水の轟きの様であった。右の手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出て、顔は強く照り輝く太陽の様であった。私は、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだ様になった。すると、その方は右手を私の上に置いて言われた。恐れるな。私は最初にして最後の者だ」（ヨハネの黙示録１章１４～１７節）

太陽は、いわば一日一回「空を横断」します。（実際は太陽が空を横断するのではなく、地球が太陽に対して回転する事で太陽が東から「上り」、西へ「沈む」ように見えるのです）

キリストの再来時、地上の人間全てが気付かずにはいられないほど荘厳かつ壮大な啓示が天に現れます！その一日を一年と解釈する説（民数記１４章３４節、エゼキエル書４章６節）では、主の日はその実現に実際に一年を費やすとされています。

大いなる艱難、天の徴、主の日は共に三年半かかります。これは、次の様な大きな出来事が起こる期間と同じ三年半です。（１）神の民イスラエルに大いなる艱難が始まり、捕らわれの身となる。（２）エルサレムが異邦人に踏みにじられる。（３）偽の

預言者が「神の神殿に座し、自分が神であると装う。」（４）二人の証人が預言を実現する。（５）神の祭司がひどい迫害を受ける。

大いなる艱難の恐怖は、神の天の徴が壮大に示される事によって短縮されます。次の記述に注目して下さい。「また、見ていると、小羊が第六の封印を解いた。その時、大地震が起きて、太陽は毛の粗い布地のように暗くなり、月は全体が血の様になって、天の星は地上に落ちた。（歴史上かつてない程の大規模な隕石の落下です）まるで、いちじくの青い実が、大風に揺さぶられて振り落とされるようだった。天は巻物が巻き取られるように消え去り、山も島も、みなその場所から移された。（想像を絶する規模の大地震です）地上の王達、高官、将軍、裕福な者、力ある者、また、奴隷も自由な身分の者もことごとく、洞穴や山の岩間に隠れた。彼らは山と岩に向かって叫びました。私達の上に覆いかぶさって、玉座に座っておられる方の眼前と小羊の怒りから、わたし達を匿ってくれ。神と小羊の怒りの大いなる日がもたらされたが為に、誰がそれに耐えられるであろうか。」（ヨハネの黙示録６章１２～１７節）

これらの激しい出来事は**福音の主要な一部なのです！**

こうした出来事の時系列に注目して下さい。（１）大いなる艱難（２）天の徴（３）主の日となります。これについては、議論の余地のない明確な証拠が２箇所、聖書の言葉にあります。一つはヨエル書２章３１節「主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる。」であり、もう一つはマタイによる福音書２４章２９節です。「その艱難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。」

上記の書物はイエス・キリストが実際に仰った事を引用しています。以下の節を見て下さい。「そのとき（天の徴の後）、人の子の徴が天に現れる。そして、その時、地上の全ての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るだろう。（その方の顔を見るのではなく、太陽が地球に近づいて来るかの様な、眩い光を見ます）」（マタイによる福音書２４章３０節）

さて、イエス・キリストが弟子達に伝えられたメッセージの大部分がお分かりになったと思います。それは、やがて訪れるであろう、世界を治める神の国についての強力なメッセージでした。（イザヤ書２章、ミカ書４章、イザヤ書１１章、ヨハネの

黙示録２０章）また、人がいかに神の聖霊を受け入れて神の子と成るかという事、即ち贖罪についてのメッセージでもあります。イエスが地上に降りて来られる最後のラッパが鳴る時に、悔い改めたキリスト教徒が神の家族として生まれられるよう、つまり神の王国の一員となる為に「生まれ変わる」事に関するメッセージでした！

キリストは、一般の人々に対してなぜ謎めいた話や奥義をされたのでしょう？

多くの人々は、イエス・キリストは救える人を全て救おうとされたと思っています。イエスが絶えず一般の人々に大声で説教され、理解するよう促されたと思っています。また、イエスがご自身の元へやってきた人は誰一人拒絶する事はなかったと思っています。しかし、こうした考えは真実ではありません。
イエスの弟子達は、なぜイエスが一般の人々に奥義で謎めいた話をされたのか不思議に思っていました。「イエスはお答えになった。あなた方には天の国の秘密が与えられたが、あの人達には与えられていない。持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っている物までも取り上げられる。だから、彼らには奥義を用いて話すのだ。彼らは見ているが見えず、聞いているが聞こえない、理解していないからである。」（マタイによる福音書１３章１０～１３節）

キリストは、パリサイ人やサドカイ人の筆記者が彼に対して冷徹な態度をとった事を弟子達に話されました。キリストは彼らがイザヤ書でどの様に語られているかを次のように話されました。「イザヤの預言は、彼らによって実現した。あなた達は聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。そうでなければ、彼らは自分の目で見て、その耳で聞き、心で理解する事で悔い改めただろうし、私も彼らを癒しただろう。しかし、あなた方の目は見えていて、その耳は聞こえているから幸いだ。私は真に断言しよう。多くの預言者や正しい人達は、あなた方が見ているものを見たかったが、見ることが出来ず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」（マタイによる福音書１３章１４～１７節）

人々は、自らの独尊的で宗教的な優越感によって耳が遠くなり目が閉じてしまったので、キリストは、「そうでなければ、彼らも悔い改めように！」というご自身の教えの意味を、意図的に難解なものとしたと言われました。

なぜでしょう？それは、神がこの下界でご自身の計画を明確なスケジュールで進めておられるからです。それはまだ群衆が理解するべき時ではなかったのです。イザヤが膨大で重要な預言を託された時、彼は、ケルビムや大天使の様な、神の玉座を取り巻き創造された聖霊セラフィムの幻を見たと明かしています。その一つが手に祭壇から取った炭火を持って彼のもとへ飛んで来て、それを（幻の中で）イザヤの唇に触れさせた。その時、神のメッセージを世界へ伝える用意が出来たとイザヤは言いました。（イザヤ書６章１～８節）

「主は言われた。行け、この民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな；よく見よ、しかし悟るな。この民の心をかたくなにし、耳を鈍くし、目を閉じさせよ；目で見て、耳で聞き、その心で理解する事で、悔い改め癒される事の無いように。私は言った。主よ、いつまででしょうか。主は答えられた。町々が崩壊し、住む者もなく、家々には人影もなく、大地が荒廃して崩れ去る時まで。」（イザヤ書６章９～１１節）

別の言い方をすると、人々の目を覆う「ヴェール」が最後に取り払われる時、つまり、時代の終わり迄と言う事です。

地上での神の王国の設立と、キリストの千年の統治の時について、イザヤは預言しました。「万軍の主はこの山で祝宴を開き、全ての民に良い肉と成熟したワインを用意される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きのワインだ。主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布と、すべての国を覆っていたヴェールを破壊し、死を永久に滅ぼして下さる。主なる神は、すべての顔から涙を拭い、ご自分の民の恥を、地上から拭い去って下さる。これは主が語られた事である。」（イザヤ書２５章６～８節）

キリストは、理解しうるのは神が召された者だけだと説明されました。「私をお遣わしになった父が引き寄せた者以外は、だれも私のもとへ来る事は出来ない。」（ヨハネによる福音書（６章４４節）

これについて、多くの人々が非常に困惑しています。神が大いなる目的のためにスケジュールを定められて大いなる計画を進めておられる事を理解せず、神が「公正でない」かもしれないと思っています。目を覆われ、理解出来ず、召されなかった者は迷ってしまったのでしょうか？

多くの人々に受入れられている偽の教義の一つが「救われるか迷うか」という考え方です。主な宗波は、今日（彼らが説教する人々の生涯という意味です）が「救われる唯一の日」です！と教えています。死者の大いなる復活と一般的な復活（ヨハネの黙示録２０章）というイエスの大きな白い玉座の裁きに関する教えを理解せず、人は生涯「救われる」か、「迷うか」のどちらかだと信じています。中国、インドネシア、日本、モンゴル、ネパール、インド、クルド、アフガニスタン、その他多くの国々の無数の人々や何億ものイスラム教徒も、この考えを「永劫に燃える地獄」と結び付けています。彼らが崇拝する「神」はそのように残酷なのでしょうか？ご自身が愛であると言われる神は、キリスト教について何も知らず、イエス・キリストの名を聞いた事のない純真な子供を、彼らが福音を聞いたり理解する機会が無かったという理由で、毎日、毎週、何年も果てしなくフライパンの上のステーキの様に焼き、苦悩で悶絶させるような事をされるのでしょうか？どんな物事にしても、小さな子供がどれだけそれを理解出来るというのでしょうか？

古典的な仮定の話では、この様な考え方は次の様な意味となります。５歳の中国人の少女が命にかかわる病気で苦しんでいたとしましょう。宣教師が彼女の村へ向かっていますが、舗装されていない道でタイヤがパンクしてしまい、少女が亡くなる前に「イエス様」の教えを説くのに間に合いませんでした。これでは、少女は直ちに燃え続ける地獄の炎で永遠に焼かれる事になってしまいます。同じ様に真実では無いものの、カトリックの教義は、「魂の不滅」という誤った概念に基づいているため、このような場面に関する幾つかの根本的な疑問については、多少は現実的です。彼らは、この様な子供の「魂」が行く特別の「辺獄」があるとしています。その「辺獄」は、「煉獄」の区切られた一画の様になっていて、中間状態の「救われない」魂が「至福直感」を得る前の中間状態の期間そこで待っているというものです。こうして、父祖リンボ界（limbuspatrium:キリスト以前の父祖達のため）と、幼児リンボ界（limbusinfantum）が考案されました。

キリスト自身、神の真実を聞いた者の多くですらそれを理解していないと言われました。ご自身の「種を蒔く人の奥義」の後で、なぜ人々が理解出来ない様な謎めいた話をされたのか、イエスは説明され、奥義の意味を弟子達に密かに話されました。

「では、種を蒔く人の例えを聞きなさい。誰かが御国の言葉を聞いて、それを理解しない時は、邪悪な者が来て、その心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれた種とは、こういう人の事である。石だらけの所に蒔かれた種とは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために苦難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人の事である。茨の中に蒔かれた種とは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を遮り、実らない人の事である。良い土地に蒔かれた種とは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」（マタイによる福音書１３章１８～２３章）

明らかに、その時イエス・キリストは、神の真実を聞く事によって多くの人々が神に召される時、サタンの世界に深く捕らわれているために御言葉を拒否する者もいる事を示されました。はじめは熱狂的に受入れるものの、家族や友人の為、あるいは彼らが「妙な」宗教を信じていると考える社会の他人からの迫害のために、すぐに信仰や約束を捨てる者もいます。家、車、お金、投資、身の安全や「富の誘惑」等の物欲によって「御言葉を遮ぎってしまう」者もいます。彼らはこの短い物質的人生に完全に捕らわれ、素晴らしい神の王国を見失っているのです。

では、神は、ある者は目を閉ざされたままにして置き、他の者は特別に召される事から、やはり、いくぶん「不公平」なのでしょうか？パウロはこの重要な質問についてローマの異邦人に説明しました。ローマの人への手紙９，１０，１１章を注意深く学んで下さい。全てを転記するスペースがありませんので、重要な部分を抜粋します。パウロは、神は人々の目を閉ざされたままにしたり、この最初の物理的人生の間に救いを受けさせないだけでなく、時として、神の目的の為に彼らの心をわざと苦しめられると述べました。

「『私はヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書いてあるとおりです。これをどう思いますか？神に不義があるのでしょうか？決してそうではありません。神はモーゼに、私は自分が憐れもうと思う者を憐れみ、慈しもうと思う者を慈しむ、と言っておられます。従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです。聖書にはファラオについて、私があなたを立てたのは、あなたによって私の力を現し、

私の名を全世界に告げ知らせるという、同じ目的の為である、と書いてあります。」（ローマ人への手紙９章１３～１７節）

パウロは、神がいかにユダヤ人達の眼を閉ざされたかを語りました。彼はオリーブの木の例えを用い、イスラエルを木に、異邦人を元の木に取って代わった「接ぎ木した」木に例えました。

神はこれを「公正に」されたのかどうかという質問を予期して、パウロはローマの信徒に語りました。「この様に、神は御自分が憐れみたいと思う者を憐れみ、かたくなにしたいと思う者をかたくなにされるのです。そこで、あなたは言うかもしれません。ではなぜ、神はなおも人を責められるのだろうか？だれが神の意思に逆らう事が出来ようかと？だが、人間よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、どうして私をこの様に造ったのか？、などと言うべきだろうか？焼き物師は同じ粘土から、一つを貴い事に用いる器に、一つを貴くない事に用いる器に造る権限があるのではないか？もし神が、怒りを示し、その力を知らすつもりだったのに、怒りの対象の器として滅びる事になっていた者達を寛大な心で耐え忍ばれたのだとしたらどうでしょう？それも、憐れみの対象の器として栄光の為に準備された者達に、御自分の豊かな栄光をお示しになる為であったとしたら？その憐れみの対象には、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも選ばれた私達も含まれているのです。」（ローマ人への手紙９章１８～２４節）

パウロは、ユダヤ人の「目が閉ざされる事となった理由の一つ」は「異邦人の全て」を受け入れられる様にする為だと説明しました。

「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。あなた方は、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。ですから、彼らの不従順がもたらしたあなたへの憐れみを通じて、彼らもまた今憐れみを受けるに値する。神は全ての人を不従順の状態にされました（閉じ込める、目を閉ざす）が、それは、全ての人を憐れむ為だったのです。ああ、神の知恵と知識の豊かさとはなんと底深い事か！だれが、神の定めを調べ尽くし、神の道を理解し尽くせよう！」（ローマ人への手紙１１章２９～３３節）

「福音」を聞いた事があると信じる多くの人達は、これらの重大な真実を何も知りません。神は自らの民、イスラエルを選ばれ、彼らをエジプトから招き出されて契約を提案されました。彼らが神の法に従った折は、神は彼らに想像を超える恵みを授けられました。パウロは、彼らを折り取られた「自然のオリーブの木」に、そして異邦人を、そこに「接ぎ木」され、救いの約束を受けた「野生のオリーブの木」に例えました。

我々が好もうと好むまいと、賛成しようとしまいと、イエス・キリストは「救いはユダヤ人からくる」と、はっきり言われました。（ヨハネによる福音書４章２２節）反ユダヤ社会が好むか好まざるかに関わらず、イエス・キリストはユダヤ人です。先に読まれた様に、「ご自分の民の所へ来たが、民は受入れなかった」とあります。サマリアの女がイエスに尋ねました、「あなたがどうしたらユダヤ人で・・・？」、イエスははっきりと、「ユダ家」の出身だと言われました。（ヘブライ人への手紙７章１４節）

パウロがローマの信徒へ説明した事に注目して下さい。「私はキリストの名において真実を語り、偽りは言わない。私の良心も聖霊を通じてそう確信しています。私には深い悲しみがあり、私の心には絶え間ない痛みがあります。私自身、兄弟達、つまり血肉を分けた同胞の為ならば（ユダヤ人の事です。パウロは彼はヘブライ人の中のヘブライ人だと言いました）キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思えるからです。彼らはイスラエルの民です。神の子（息子である事）としての身分、栄光、契約、律法、礼拝（神を真に崇拝するため、この世で祭司である時に神が認められた唯一の場所である神殿での礼拝）、約束は彼らのものです。キリスト由来の先祖達さえ、逆上れば彼らのものなのです。キリストは、万物の上におられる、永遠に褒め称えられる神なのです。アーメン。」（ローマの人への手紙９章１～５節）

二千年近く前にキリストがナザレで聖職者となられてから、ユダヤ人はキリストを拒否していましたが、その時、ホセアの預言がなされました。「わが民は無知故に滅ぼされる。お前が知識を拒んだので、私もお前を拒み、もはや、私の祭司とはしない。お前が神の律法を忘れたので、私もお前の子らを忘れる。」（ホセア書４章６節）

私達はイエス・キリストを信じる事が出来ますか？キリストはイザヤ書の預言で、心の目が閉ざされてしまった、とはっきり言われました。だからこそキリストは謎めいた

訓話を用いて、そうでなければ人々も「悔い改め」、キリストも彼らを癒しもしようと諭されたのです。

多くの人々は、キリストがはっきりと説明されたにもかかわらず、なぜ奥義で話されたのか理解していません。でも、あなたはお分かりになったでしょう。イエス・キリストはその時、世界を救おうとされたのではありません。キリストはご自分の民が、精神的に目が閉じられ、ご自分に対して彼らの心が冷徹になっていた事をご存知でした。キリストは弟子達に彼らは特別に召されたと話されました。また、「多くの正義の人々」がキリストが彼らに説かれた事を知りたいと望むが、それはその時一般大衆に「与えられる」ものではないと言われました。

イエス・キリストは「私は私の教会を建てる」と約束されました

教会という言葉には、福音という言葉よりも更に多くの誤解と混乱があります。多くの人々は、教会という言葉から建物や宗波、あるいは宗教組織を思い浮かべます。一般的な表現として、「私は教会へ行きます」、「私達は、どこそこの教会のメンバーです」と言います。教会は、尖塔（この風習の起源は興味深いので是非調べてみて下さい）やステンドグラスの窓がある、十字架の形をしている事が多い建物です。人々はバシリカや大聖堂などの大きな石やレンガ造りの構造物を「教会」であると思っています。

しかし、ギリシャ語で「教会」はカテドラルや建物という意味とはかけ離れています。ギリシャ語ではエクレシア（ekklesia）と言い、単に「集合」を意味します。「グループ」や「召しだされた者達」と考えられます。

イエスはペトロと弟子達に言われました。「私も言っておく。あなたはペトロ（ギリシャ語でペトロス〔Petros〕石や小石の意）。私はこの岩（ギリシャ語でペトラ（Petra）一枚岩や岩山の様な巨大な石）の上に私の教会を建てる。地獄の門（ハデス〔hades〕墓の意）の力もこれに対抗出来ない。私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で繋ぐ事は、天上でも繋がれる。あなたが地上で解く事は、天上でも解かれる。」（マタイによる福音書１６章１８，１９節）

ギリシャ語にはラテン語同様、男性格と女性格の活用語尾があります。ペトロ（petros）は「岩」の男性格で、人が手で拾い上げるような「石」を意味します。女性格の語尾を持つあるペトラ（petra）は、一枚岩のような大きな岩を意味します。これは非常に重要な事です。多くの人々が、キリストはご自身の教会をペトロの上に建て、ペトロが「最高権威も持っていた」と教えられてきました。これは真実ではありません。キリストは、ご自身がご自分の真の教会の指導者であり、他の誰にもその指導権を与えられていません。

ほんの２章後に、キリストが弟子全員に言われた事が記されています。「はっきり言っておく。あなたがたが地上で繋ぐ事は、天上でも繋がれ、あなたがたが地上で解く事は、天上でも解かれる。また、はっきり言っておくが、どんな願い事であれ、あなた方のうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、私の天の父はそれを叶えて下さる。二人または三人が私の名によって集まる所には、私もその中にいるのである。」（マタイによる福音書１８章１８～２０節）

キリストは「ペトロの所・・・」ではなく、「二人または三人」が集まる所と言われ、キリストが弟子達を指導し導かれるのです。

ペトロではなく、キリストがご自身の教会の指導者である事に注目して下さい。「天にある物も地にある物も、見える物も見えない物も、王座も主権も、支配も権威も、万物は**御子に**おいて創られたからです。つまり、万物は**御子**によって、**御子**の為に造られました。（既にヨハネによる福音書１章、ヘブライ人への手紙１章でご覧になられた様に）**御子**は全ての物よりも先におられ、全ての物は**御子**によって支えられています。また、**御子**はその体である教会の頭です。**御子**は初めの者、そして、死者の中から最初に生まれた方であり、全ての事において第一の者となられたのです。（コロサイ人への手紙１章１６～１８節）

エペソの信徒にパウロは言いました。キリストは、「すべての支配、権威、勢力、主権を遥かに凌駕し、それは、今の世のみならず、これから現れる名のある者全てを含む。（神は）また、万物を（キリストの）足もとに置き、キリストを万物の上に立つ頭として教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、全ての事柄において万物を満たすキリストの包容力そのものなのです。」（エペソ人への手紙１章２１～２３節）

教会はキリストの体であり、ペトロの体ではないという例えに注目して下さい！

パウロは、後に「期を違えて生まれた」者と言われましたが、ペンテコスト（聖霊降臨）の後、全ての点において自分はペトロに匹敵すると主張しました。パウロは書いています。「あの大使徒達と比べて、私は少しも引けは取らないと思う。」（コリント人への第二の手紙１１章５節）後に、彼は再び主張しました。「私は愚か者になってしまいました。あなた方が無理にそうさせたのです。私はあなた方から推薦されるべきだった。私は、たとえ取るに足りない者だとしても、あの大使徒達に比べて少しも引けは取らなかったからです。」（コリント人への第二の手紙１２章１１節）

決定的で論争の余地のない証拠として、複数の使徒達がペトロとヨハネを使命の為に派遣した事に注目して下さい。その逆ではありませんでした。「エルサレムにいた使徒達（複数形です！彼ら全員です！）は、サマリアの人々が神の言葉を受け入れたと聞き、ペトロとヨハネをそこへ行かせた。二人はサマリアに下って行き、聖霊を受けるようにとその人々のために祈った。」（使徒言行録８章１４、１５節）エルサレムの会議では、最終決断を下したのは、ペトロではなくヤコブだったとしています。（使徒言行録１５章１９節）

「教会」とは何でしょう？それは、キリストの、この世界へ来る御国という良い知らせを説くように託された、召しだされた者達の集まりです。イエス・キリストは言われました。「小さな群れよ、恐れるな。あなた方の父は喜んで神の国をくださる。」（ルカによる福音書１２章３２節）イエスは、ご自身が散ってしまう、迫害される集団になる事を示されました。「その時、イエスは弟子達に言われた。今夜、あなた方は皆私から離れて行く。私は羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散ってしまう、と書いてあるからだ。」（マタイによる福音書２６章３１節）

ヨハネが記録したように、イエスは言われました。「だが、あなた方が散らされて自分の家に帰ってしまい、私を一人きりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、私は一人ではない。父が共にいて下さるからだ。これらの事を話したのは、あなた方が私を通して平穏を得るためである。あなた方はこの世界で苦難を経験します。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世界に勝っている。」（ヨハネによる福音書１６章３２、３３節）

キリストは、ご自分の民が散ってしまう迫害は、ゼカリヤの預言の実現だと言われました。「剣よ、起きよ、私の羊飼いに立ち向かえ、私の同僚であった男に立ち向かえと、万軍の主は言われる。羊飼いを撃て、羊の群れは散らされるがよい。私は、また手を返して小さいものを撃つ。」（ゼカリヤ書１３章７節）

キリストは、ご自身の教会が偉大な目立つ、「普遍的な」教会になるだろうとは預言されませんでした。ハーレー聖書ハンドブック（７５７～８０４ページ）の興味深い記述を読んで下さい。背教者の教会がおこった事や何世紀にもわたる数十万という人々の殉教に関する信じがたい情報を目にされるでしょう。イエス・キリストは真の教会が巨大で、一枚岩的な階級制度や途方もない富を持ち、国々に政治的権力を振るう，国々が集う場所となる事は意図されませんでした。一方、大いなる偽の教会は、まさにその様に描かれています。ヨハネは、主の日に彼の魂が運ばれた時に背教者の教会の幻を見ました。

ヨハネは書きました。「さて、疫病を湛えた七つの器を持つ七人の天使の一人が来て、私に語りかけた。ここへ来なさい。多くの水の上に座っている大淫婦に対する裁きを見せよう。地上の王達は、この女と淫らな事をし（彼女とは教会同様、国々と政治的取引をする国です）、地上に住む人々は、この女の淫らな行い（偽の教義の象徴です）のぶどう酒に酔ってしまった。そして、この天使は私を霊体と言う形で荒れ野に連れて行った。私は、真紅の獣にまたがっている一人の女を見た。この獣は、全身至るところ神を冒涜する数々の名で覆われており、七つの頭と十本の角があった。女は紫と真紅の衣を着て、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものや、自分の淫らな行いの汚れで満ちた金の杯を手に持っていた。その額には、秘められた意味の名が記されており、それは、「**大いなるバビロン、淫婦達や、地上の忌まわしい者達の母**」というものであった。私は、この女が聖なる者達の血と、イエスの証人達の血に酔いしれているのを見た。この女を見て、私は大いに驚いた。（ショック、警戒、畏怖であり、良い意味の驚きではない）（ヨハネの黙示録１７章１～６節）

イエス・キリストは弟子達を呼び、父なる神から授けられたメッセージを彼らに教え、そのメッセージを世界へ説くように託されました。福音協会という言葉は、世界の

国々に対する責任に関する限り、教会の真の役割についてより正確な印象を人々の心に与えます。しかし、イエス・キリストは使途に二種類の使命を与えられました。最初の役割は、御国の福音を世界へ説く事でした。二番目の役割は、「羊にエサをやる」事、あるいは教会の世話をする事でした。こうして、初期の教会が大きくなると、イエス・キリストは、初期の使途達に教会で様々な役割を作り出すようにされました。牧師、教師、教会の男性執事、女性執事、「政府を援助する」等の役割です。これについては、コリント人への第一の手紙１２章、エペソ人への手紙４章、テモテへの手紙１、３章を学んで下さい。

神は困惑の創作者ではないので（コリント人への第一の手紙１４章３３節）、イエス・キリストはご自身の教会内に政府と組織を置かれました。イエスはそれらが「高位」の人間が信徒集団の上に立って威張る様な、傲慢で横柄な専制的独裁体制になる様な事は決して意図されませんでした。むしろ、イエスの牧師（召使）達は「喜びを手助けする者」になるよう意図されました。

それでは、あらゆる事象の中で最も大切な真実の一つを理解しましょう。

なぜイエス・キリストは亡くなったのでしょうか？

数多くの教会へ通う「キリスト教徒」は、イエス・キリストの死が彼らを「救った」と信じています！多くの人々は、「一度救われると常に救われる」と信じ、救いの為に何の勤めも必要ないと思っています。

全能の神は、人に正義であり神聖かつ完全な神の法を与えられ、二枚の石版を手にモーゼがシナイ山を降りてきた時、彼の顔が輝いていた程でした。神は、法に従う事は、長寿、健康、豊作、健康な子供、国の平和をもたらす事だと示されました。それはまた、病気、狂気、作物や財産の破壊、徴兵制、重税、戦争などの災いの欠如をも意味しました。「恵みと災い」については、レビ記２６章、申命記２８章を学んで下さい。

既にご覧頂いた様に、神はアダムが神に背いた日、アダムは死という罰を与えられたと言われました。「罪に支払う報酬は死です」（ローマ人への手紙６章２３節）しかし、全能の神は人間を愛しておられます。神はご自身を模り、ご自身に似せて人間を

創られました。神はご自身を再現されています。多くのキリスト教徒が好きな聖書の言葉です。「神は、世界をとても愛していたので、その独り子をお与えになり、その方を信じる者は滅びぬどころか、永遠の命を持つ事とされました。」（ヨハネによる福音書３章１６節）

この節を基に、無数の説教が行われてきました。自分達の宗教の「証人」と成りたいと望む人達が主要なスポーツのイベントで、大きな字で「JOHN３:１６」（ヨハネによる福音書３章１６節）とバナーに書き、それをテレビカメラが映すと思う場所に掲げています。

多くの人々がそれを暗記しています。しかし、多くの人はそれが明確に言っている事を信じていません。イエス・キリスト自身、片方の手にある命ともう一方の手にある死という両極に関する教えの中で、これらの言葉を使われました。イエスは滅ぶという言葉を使われました！イエスはそのお話の中で、罪の結果は死、破壊、滅ぶ事だと示されました！マラキ書４章１～３節を読んで下さい。一方、神の法のいずれかを破った罪を悔い改める事で罪が許され、私達の代わりに罪の罰を受けた方であるイエス・キリストを信じる事が救いへの第一段階です。

前後の節に注目して下さい。「天から降りて来た者、すなわち人の子の他には、天に昇った者は誰も居ない。」（ヨハネによる福音書３章１３節）名ばかりのキリスト教世界はキリストのこの言葉を完全に否定しています。何百万の人々が、聖書にある「聖人」が天へ上った、つまり、人が死ぬとその「魂」が天へ上ると信じています。

さらに、「そして、モーゼが荒れ野で蛇を掲げた様に、人の子もまた掲げられなければならない。（「木」もしくは杭に貼り付けられ、その上で死ぬ為に「掲げられる」事を指しています）その方を信じる者は滅びぬどころか（滅ぶ事の反対である）永遠の命を持つ事とされました。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁く為ではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。これが判決である。」（ヨハネによる福音書３章１３～１９節）行いであり、単なる「信仰」ではありません。

イエス・キリストはご自身の命、つまり全人類の命よりも重い創造主の一つの命を世界の罪のために差し出されました！罪の罰とは、「燃えやまぬ地獄の業火」の中での永遠の命ではなく、死です。イエスご自身が地獄の炎の破壊について何度も話されました。（マタイによる福音書１０章２８節、２３章３３節を参照して下さい）

ヨハネが書いた事に注目して下さい。「この方こそ、私達の罪、いや、私達の罪ばかりでなく、全世界の罪を償う（生贄となる）方です。私達は、神の掟を守る事により（言い換えれば、もし罪を犯す事を止めれば）、神を知るという事を理解しています。神を知っている、と言いながら、神の掟を守らない者は、嘘吐きで、その人の内には真理はありません。」（ヨハネの手紙１、２章２～４節）多くの人々が「神を知る」とはなんと素晴らしい事でしょう、と熱弁します。しかし、その同じ人達が神の掟、特に第四の掟に従う事を拒んでいます。彼らは第四の掟は排除されたと主張するのです。

名ばかりのキリスト教世界で最もよく聞く表現の一つが、「キリストは罪人を救う為に亡くなられた」というものです。道路沿いの納屋や古いバス、看板、岩などにこの言葉が書かれているのをご覧になった方もおられるでしょう。この表現だけを見れば、それは真実です。

パウロはテモテに書きました。「イエス・キリストは、罪人を救う為に世に来られた」という言葉は真実であり、全身全霊で受け入れるに値します。私は、その罪人の中で最たる者です。しかし、私が憐れみを受けたのは、イエス・キリストがまずその私に限りない忍耐をお示しになり、私がこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となる為でした。」（テモテへの第一の手紙１章１５，１６節）しかし、イエス・キリストの死は、罪の許しにのみ有効で、罪を犯し続ける事を全面的に許すものではありません！

湖に自ら身を投げて溺れている人が助けを求め始めたのを見て、あなたがその人を助けたとします。しかし、その人が同じ湖に再び身を投げたら、あなたはどう思うでしょう？

キリストが私達を助けられる時、私達が犯した罪をご自身の流された血で贖われる時、キリストが私達を救い出してくれた前の生活に、舞い戻る許しを与えて下さった

訳ではありません！救いには、キリストが私達の罪の為に亡くなられた事だけではなく、天の大祭司としてのキリストの命も含まれています。「しかし、私達がまだ罪人であった時、キリストが私達の為に死んで下さった事により、神は私達に対する愛を示されました。その上、私達はキリストの血によって正された事により、キリストによって神の怒りからも救われる事でしょう。私達が敵であった時でさえ、**御子**の死によって神と和解させて頂けたのですから、和解させて頂いた今、私達は**御子**の命によって更に救われる事となるでしょう。」（ローマ人への手紙５章８～１０節）もし、キリストの死自体が世界を救ったなら、キリストが復活される必要はありませんでした！肉体の罪を克服し、世界の統治者となる権限を得て、死者の中から復活させられ、キリストが現在「生きておられる」から、救いの計画は完成されるのです！

私達が許される時、神は、神の法に沿った以前とは違う新たな暮らしを送る事を私達に期待されます。悔い改めた後に洗礼を受ける時、法は私達が「死んだ」とみなします。罰を受けたという事です。キリストは、私達の代わりに罰を受けられました。湖に再度身を投げた人の様に、私達が以前と変わらない生活を続けたなら、それはイエス・キリストに対して恩を仇で返す事になります。

パウロはこの様に書いています。「私達は、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きる事にもなると信じます。そして、死から復活させられたキリストはもはや死ぬ事がないと、知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死んだのは、ただ一度だけ罪の為になされた事だが、キリストが生きるその命は、神の為に生きるものです。この様に、あなた方も自分はその罪においては死んでいるが、イエス・キリストを通して、神の為に生きているのだと考えなさい。従って、あなた方はその死ぬ定めにある体を罪（神の法のどの部分であっても破る事）に支配させて、その欲望に従うような事があってはなりません。（ローマの人への手紙６章８～１２節）

なぜキリストは亡くなられたのでしょう？それは、神に反抗し、神を拒否し、罪を犯し、法を無視する人類へのキリストの愛と天の父の愛が非常に寛大が故に、ご自身が創造された者の為、ひどい屈辱と鞭打ちの刑、そして苦痛の後に、キリストは進んでその命を与えられて亡くなったのです！もうお分かりの様に、「キリストは罪人を救う為に亡

くなった」という幾度となく繰り返される言葉が人々に伝えるよりも、もっと理解すべき事が多々あるのです。大いにある so much more to understand

イエス・キリストは本当に死から復活されたのでしょうか？

これは最も重要な質問です。イエス・キリストの復活はあらゆるキリスト教が拠所としている極めて重要な真実です。イエス・キリストは常にご自身の復活を予告されました。ある時、キリストは、ペトロ、ヤコブ、ヨハネに「変貌」という形で来る御国の幻をお見せになりました。マタイによる福音書１７章を読んで下さい。幻が消えた後、彼らが山から下りる時、イエスは「人の子が死から復活するまで、今見た事を誰にも話してはならない」と弟子達に命じられました。（マタイによる福音書１７章９節）

それから間も無く、イエスはご自身の死と復活をはっきりと予告されました。「一行がガリラヤに集まった時、イエスは言われた。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。そして殺されるが、三日目に復活する。弟子達は非常に悲しんだ。」（マタイによる福音書１７章２２、２３節）イエス・キリストが捕らえられ、ひどく鞭で打たれて亡くなった時、予言通りに、弟子達は皆イエスを見捨て、逃走しました。詳細について、ヨハネによる福音書１８章～２１章を学んで下さい。イエスの死の目撃者による文書からはっきり分かる様に、イエスの弟子達はイエスが復活された事を信じませんでした！

しかし、５つの異なる場面で、イエス・キリストは弟子達にご自身が亡くなり、死から復活するだろうと話されました。最初の場面は、イエスが「エリヤ」や「洗礼者ヨハネ」、あるいは「預言者の一人」であるという誤った話が広まったにもかかわらず、ペトロがイエスがメシアであると告白した後の事です。（マタイによる福音書１６章２１節、マルコによる福音書８章３１節、ルカによる福音書９章２２節）二番目の場面は、先ほど記した変貌に纏わったものであり、三番目は、癲癇を癒された後です。四番目は、ガリラヤを通過した際です。（マタイによる福音書１７章２２～２３節、マルコによる福音書９章３１節）五番目は、エルサレム近郊で、次の様に至極明細なものでした。

「イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。今、私達はエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いた事はみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。十二人はこれらの事が何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われた事が理解出来なかったのである。」（ルカによる福音書１８章３１～３４節）

イエス・キリストが弟子達に、ご自身の近い将来の死、埋葬、復活を、幾度繰り返しはっきり話されても、彼らは全く理解しませんでした！それ故、彼らはイエスが復活された直後、それを信じなかったのです。

「イエスの弟子達が遺体を持ち去った」という話が意図的に当時広められ、以来ずっと繰り返されてきた事からも、これは重要な点です。イエスは単に「気絶」していたとか、弟子達がイエスと共に偽の復活を企んだと主張する様々な本が何世紀にも渡って書かれてきました。

しかし、弟子達はイエスが復活された事を信じていなかった事に注目して下さい。「そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の者が側に現れた。婦人達が恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここには居られない。復活なさったのだ。まだガリラヤに居られた頃、お話しになった事を思い出しなさい。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架に釘付けにされ、三日目に復活する事になっている、と言われたではないか。そこで、婦人達はイエスの言葉を思い出した。そして、墓から帰って、十一人と他の人皆に一部始終を知らせた。それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人達であった。婦人達はこれらの事を使徒達に話した。使徒達は、この話が戯言のように思われたので、彼女等を信じなかった。」（ルカによる福音書２４章１～１１節）

イエス・キリストが何度か、様々な場所に直接姿を見せられ、時には奇跡的に壁を通り抜けて現れられて、やっと彼らは復活を信じました！彼らがエマオという村へ向か

っている時に、キリストが姿を現された事は、同じ章の１３節から３１節までを読んで下さい。

彼らの不信心を聞かれた後、イエスは彼らを嗜めて言われました。「ああ、預言者達の言った事全てをなかなか信じぬ愚か者共よ、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に召される筈だったのではないか？そしてキリストは、モーゼと全ての預言者から始め、聖書全体に渡って御自分について書かれている事を説明された。」（ルカによる福音書２４章２５～２７節）

そのすぐ後、彼が食事をしている時、イエスは「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、彼らの目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」（ルカによる福音書２４章３０，３１節）

「疑い深いトマス」の話を聞かれた事のない方は居られるでしょうか？キリストは突如、大きな、戸が閉められた部屋に現れられました。そこには、弟子達が「ユダヤ人を恐れて集まっており、（そこへ）イエスが来て真ん中に立ち、あなた方に平和があるように、と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子達は、主を見て喜んだ。」（ヨハネによる福音書２０章１９,２０節）

彼らがトマスにその事を喜んで伝えた時、起こった事に注目して下さい。「しかし、十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られた時、彼らと一緒にいなかった。そこで、他の弟子達が、私達は主を見た、と言うと、トマスは言った。あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、私は決して信じない。さて八日後、弟子達はまた家の中に居り、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵が掛けてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、あなた方に平和があるように、と言われた。それから、トマスに言われた。あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私のわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。トマスは答えて、我が主、我が神よ、と言った。イエスはトマスに言われた。あなたは私を見る事で信じたが、見なくとも信じる者達こそ祝福に値する。イエスは弟子達の前で、この他にも多くの証を立てましたが、それはこの書物には書かれていません。これらの事が書かれたのは、

あなた方が、イエスは神の子メシアであると信じる為であり、また、信じてイエスの名により命を受ける為である。」（ヨハネによる福音書２０章２４～３１節）

キリストが復活された後、弟子や他の人達の前に現れられたという数多くの記録は勿論、ヨハネは記録されていない沢山の事例もあると述べています。

パウロは書きました。「最も大切な事として私があなた方に伝えたのは、私自身も受け賜った事です。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり私達の罪の為に死んだ事、葬られた事、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活した事、ケファ（ペトロ）の前に現れ、その後十二人の前に現れた事です。次いで、同時に五百人以上もの兄弟達の前に現れました。その内の何人かは既に眠りつきましたが、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブの前にも現れ、その後すべての使徒の前に現れ、そして最後に、期を違えて生まれた私の前にも現れました。」（コリント人への第一の手紙１５章３～８節）

ヨハネの兄弟ヤコブは打ち首にされました。（使途言行録１２章１、２節）パウロ自身は、おそらくローマの円形競技場に放り込まれて、殉教しました！ステパァノは投石により撲殺されました。（使徒言行録７章）多くのキリストの召使達が殺されました！考えてみて下さい！でっちあげだと分かっている共謀した「企み」の為に、この様な野生の動物に引き裂かれたり、生きたまま焼かれたりする恐ろしい死に、人は自らその身を投げ打つでしょうか？その様な事は、想像する事さえ出来ません！

ユダヤ人が「イエスの遺体を盗み去った」ですって？馬鹿げています！もしそうだとしたら、公の場所に展示したでしょう！キリストの墓を昼夜見張るべきだとローマ人に申し入れたのは彼ら自身です！

イエス・キリストの復活は、後にキリスト教を信仰する作家達によって「追加」された想像力豊かな説ではありません。そうではなく、彼らの信仰の源そのものだったのです！福音の大部分は、イエスの復活の事実であり、なぜ死から蘇られたかに関する驚くべき真実です！イエスは、ご自分の敵が打ち負かされるまで、「敵がご自分の足台となる」まで、そして「万物の再構築の時」まで、天の父の右の座について居られます。

ペンテコスト（聖霊降臨祭）の日、ペトロは言いました。「神はこのイエスを復活させられたのです。私達は皆、その証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いで下さいました。今あなた方が見聞きしているとおりです。（彼らの頭の周りには炎の光冠が燃え立ち、強風の様な音が激しく轟いています）ダビデは天に昇りませんでしたが、彼自身こう言っています。主は、私の主にお告げになった。私の右の座に着け。私があなたの敵をあなたの足台とする時まで。」（使途言行録２章３２～３５節）

使途達が幾度となく繰り返した最も重要な事実とは、彼らがイエスの死を目撃し、その後イエスが生きておられる事を目撃した事でした！このメッセージが彼らへの迫害の原因となりました。近い

「ペトロとヨハネが民衆に話をしていると、祭司達、神殿守衛長、サドカイ波の人々が近づいて来た。二人が民衆に教え、イエスに起こった死からの復活を宣べ伝えていたので、彼らは苛立ち、二人を捕らえて翌日まで牢に入れた。・・・」（使徒言行録４章１～３節）

コリント人への第一の手紙１５章の有名な「復活」の章を学んで下さい。パウロは、もしイエス・キリストが死から復活させられたのでなければ、キリスト教自体が無駄になってしまう事をはっきりさせました。彼は書きました。「キリストは死から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなた方の中に、死者の復活など在り得ないと言っている者達が居るのはどういうわけですか？死者の復活が在り得ない事ならば、キリストも復活しなかった事になります。そして、キリストが復活しなかったのなら、私達の宣教もあなた方の信仰も無駄となってしまいます。更に、私達は神の偽証人とさえ見なされてしまいます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に背いて証しをした事になるからです。死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなた方の信仰は無意味と成り、あなた方は今もなお罪の中に在る事になります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。この世の人生だけの為にしかキリストに望み持てないとしたら、私達は全ての人の中で最も惨めな者達です。しかし、実際、キリストは死から復活し、眠り

についた人達の初穂となられました。」（コリント人への第一の手紙１、１５章１２～２０節）

死者からの「初穂」とは、ペンテコスト（聖霊降臨祭）として知られるようになった初穂を捧げる祭りの事です。この祭りは、種なしパンの祭りの間の週の安息日から七回目の安息日の「翌日」まで、すなわち５０日目の日を数える事で決定されました。ですから、ペンテコストとは、単に「５０番目」という意味です。キリストは「多くの兄弟の中で長子」（ローマ人への手紙８章２９節）です。やがては神のもとに生まれる人々は、長子であるイエス・キリストと同じ神霊的な家系の一員となります。これについては、コリント人への第一の手紙１５章５０～５２節、ローマの信徒への手紙８章１５～２９節を学んで下さい。

イエス・キリストは、どれくらいの期間埋葬されていたのでしょうか？

イエス・キリストが真のメシアであるという証拠として世界に残された唯一の永遠の印は、埋葬される正確な期間でした！イエスは言われました。「つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいた様に、人の子も三日三晩、大地の中にいる事になる。」（マタイによる福音書１２章４０節）しかし、何世紀もの間、大きな見える教会を制圧した背教行為にならって、多くの人々がキリストは三日三晩の一部だけ埋葬されていたと教えられてきました。こうして、いつの間にか、何世代にも渡って名ばかりのキリスト教徒達は、キリストが残された唯一の印を無意識の内に拒否してきたのです。

春分の日と春の新しい命を祝うだけの「イースター」を取り巻く異教徒の伝統によって、「聖金曜日、イースターの日曜の朝」という寓話が取り入れられました。これは非常に大きなテーマであり、イースターがどの様にして見える教会に強制されたのかを証明する膨大な文献があります。

イエス・キリストは金曜日に埋葬されたのではなく、「イースターの日曜」に復活されたのでもありません。キリストは水曜日の午後遅くに埋葬され、ちょうど三日三晩の後、安息日の午後遅くに復活されました。キリストの死、埋葬、復活の正確な時に関する素晴らしい資料がブリンガー著、必携聖書の注釈や付属書にあります。

キリストご自身が埋葬される期間をはっきり言われました。それはヨナ書に引用されており、ヨナ書はギリシャ語ではなく、ヘブライ語で書かれています！多くの人々は「三日三晩」という表現はギリシャ語の慣用句で、文字通りの意味ではないと教えられてきました。３２５年のニカイア公会議以来伝えられた伝統に固執しようとする人々は、ヨナ書では慣用句が使われていると主張してきました。

使途ヨハネはキリストの死の詳細を記しました。「イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。（ギリシャ語では、「最後の息をする」あるいは「息を吐く」）その日は準備の日であったので、ユダヤ人達は、安息日に（その安息日は特別の日であったので）遺体を十字架（ギリシャ語で、杭または棒）の上に残しておかないように、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。」（ヨハネによる福音書１９章３０，３１節）

この日は、「特別の安息日」、あるいは種なしパンの祭りの最初の日（レビ記２３章６節）であり、通常の安息日ではありませんでした。それは木曜日にあたるので、遺体は水曜日の午後遅くに埋葬された事になります。祭りは常に聖なる年の最初の月、ニサンの月の１５日目にあたります。キリストは、最初の過ぎ越し祭の子羊が殺される１４日目に亡くなりました。何千という真のキリスト教徒は頑なにキリストの習慣と紀元１世紀の使徒達の慣行に固執したので、彼らは「クオートデシマン」と呼ばれるようになりました。その言葉は、「十四日者」という意味です。彼らキリスト教徒は、キリストが使徒達に伝えられた事と同じ習慣を守りました。（コリント人への第一の手紙１１章２３節）クオートデシマンは、情け容赦なく迫害され、異教徒のイースターを拒否し、代わりにニサンの１４日に固執したという理由で死刑になりました。

ブリンガーの必携聖書付属書１４４で、マタイによる福音書１２章４０節の「三日三晩」の正確な意味についての詳細な説明がされています。その中で、『“日”の数のみならず“夜”の数も宣言されている時、その表現は慣用句ではなくなり、文字通りの事実を指す言葉になる』とブリンガーは述べています。

『さらに、ヘブライの一日は日没に始まり、日没から次の日没までが一日とされるので、「昼間の十二時間」（ヨハネによる福音書１１章９節）とは、日の出からであり、夜の十二時間とは日没からだと考えられる。夜から暁とは、創世記の第１章に見られ

る様に、２４時間から成る一日を表すのに使われた。従って、コリント人への第二の手紙１１章２５の「夜と昼（日・晩）」という表現は、丸一日（ギリシャ語でnuchthemeron）を意味する。

エステルが「私の為に断食し、飲食を三日間断って下さい」（エステル記４章１６節）と言っているが、（ユダヤ女性である）彼女は「日・晩」と数えるので、丸三日間を意味しているのです。断食は「三日目」（５章１節）に終わったと書かれており、「三日目」とはその夜も含めたものだったのです。

同様に、聖書では若者が「三日三晩、食べ物も食べず水も飲まずにいた」（サムエル記上３０章１２節）と記している。若者はその理由を説明して、「三日前に病気になった」と言っている。彼はエジプト人であるので（１１節、１３節）、エジプト人の習慣（ブリタニカ百科事典第１１版〈ケンブリッジ大学出版局〉１１巻７７ページ）で当然一日を日の出から考えているため、丸三日三晩という意味になる。彼の言う「三日前」とは、病気になり始めた時と病気である期間を指し、その期間中何も食べていなかったという理由を示している。

従って、『「ヨナが魚のお腹の中に三日三晩いた」（ヨナ書１章１７節）というのは、まさにその通りを意味し、マタイによる福音書１２章４０節、１６章４節、ルカによる福音書１１章３０節の記述の意味もその通りであるという事を、付属書１５６で示している』（同書１７０ページ）

何世紀もの間、いわゆる「学者達」は、キリストが亡くなったのは紀元２９年、３０年、３２年、あるいは３３年とすら主張してきました！彼らは決して紀元３１年を選択しませんが、それは、２９年から３３年の５年の間で唯一、種なしパンの祭り、あるいはニサンの１５日が木曜日に始まる年だからです！

イエス・キリストは水曜日の午後遅くに亡くなりました。ゴルゴタ近くの新しい墓に直ちに埋葬されました。「彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ。イエスが十字架付けにされた所には園があり、そこには、だれもまだ葬られた事のない新しい墓があった。その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かったので、そこにイエスを納めた。」（ヨハネによる福音書

１９章４０～４２節）準備の日は水曜日で、それは種なしパンの祭りの「特別な安息日」の為の準備でした！

イエス・キリストは現在、生きておられるのでしょうか？

キリストが復活された時、人の肉体を持った姿から文字どおり魂からなる姿へ変わられました。墓を覆う巨大な石はキリストを墓から出す為にわきに転がったのではなく、世界がその中を見られる為でした！女性達が墓に来る数時間前までに、イエスはすでに復活されていました。

マタイは書きました。「安息日（週毎の安息日であり、キリストが埋葬されてから三日目の日）が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった（ギリシャ語では、既に起こっていた）。主の天使が天から降りて近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。」（マタイによる福音書２８章１、２節）多くのキング・ジェームス版（欽定訳）聖書の傍注でも、「起こった」ではなく、「既に起こっていた」としています。ブリンガーの必携聖書はこの言葉「わきへ転がった」に関して、「わきへ転がっていた」と注釈をつけています。石を押しのけた地震は、女性達が到着する以前に起こっていた、過去の出来事だったのです。皆さんがご覧になってきたように、キリスト復活の証拠は多々あります。

キリストは、弟子達を決して見捨てず、常にご自身の民と共におられ、ご自身の教会を見守られる、と約束されました。「イエスがお越しになって言われました。私は天と地の一切の権力を授かっている。だから、あなた方は行って、全ての民に教えを広めなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなた方に命じておいた事を全て守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる。」（マタイによる福音書２８章１８～２０節）

マルコは書きました。「主は、弟子達に話した後、天に召され、神の右の座に着かれた。弟子達は出かけて行って、至る所で宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実である事を、それに伴う印によってはっきりとお示しになった。アーメン」（マルコによる福音書１６章１９，２０節）

ステパノが投石によって殉教した時、彼は死に臨んで叫びました。「しかし、ステパノは聖霊に満たされていたので、しっかりと天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見たのです。そして、彼は言いました。見よ、天が開いて人の子が神の右に立っておられるのが見える、と。人々は大声で叫びながら耳を手で塞ぎ、ステパノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人達は、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。」（使途言行録７章５５～５８節）

サウロはダマスコへの途上、光に打たれて改宗し、使途パウロとなりました。彼は砂漠での三年以上の期間に、イエス・キリストを見たのかもしれません。彼は書いています。「私は使徒ではないのか？自由な者ではないのか？私達の主イエスを見た筈ではないのか？」（コリントの人への第一の手紙９章１節）パウロがイエス・キリストを直接目にする事が出来た唯一の時とは、彼がアラビアにいた時です。

彼はガラテヤの信徒に書きました。「しかし、私を母の胎内にある時から選び分け、恵みによって召し出して下さった神が、御心のままに、御子を私に示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた時、私は、すぐ血肉（人間の事）に相談するような事はせず、また、エルサレムに上って、私より先に使徒として召された人達のもとに行く事もせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。それから三年後、ケファ（ペトロ）と知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、他の使徒には誰にも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。」（ガラテヤ人への第一の手紙１章１５～１９節）

イエス・キリストが生きておられたという事実の目撃者が何百人もいただけではなく、パウロはアラビアの砂漠にいた間に何度も繰り返しイエス・キリストを目撃したのかもしれません。

ヘブライ人への手紙は全て、大祭司イエス・キリストに関するものです。キリストがご自身の左手の御父に、ご自身の民の代わりに日々執り成しをされている事を記している、聖書の中でも大変重要な書です。

「さて、私達には、あまねく天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、私達の公言する信仰をしっかり保とうではありませんか。この

大祭司は、私達の弱さに同情出来ない方ではなく、罪こそ犯さなかったものの、あらゆる点において、私達と同じ様に誘惑を体験されました。だから、憐れみを受け、恵みにあずかり、窮地の折には救って頂けるよう、自信を持って恵みの座に近づこうではありませんか。」（ヘブライ人への手紙４章１４～１６節）

ヘブライ人への手紙の核心は、レビ記での祭司キリストを凌ぐ生ける大祭司キリストの効力にあります。すなわち、キリストは生きておられ、ご自身の教会を導き、教え、正され、人の出来事に介入し、ご自身の民の代わりに執り成しをされ、この世に戻る時を待っておられるのです。

昔から崇拝されている名だたる神の殉教者達を列挙したヘブライ人への手紙の素晴らしい１１章を読むと、私達はこうした偉大な証人達を思い起こし、イエス・キリストを生ける救世主として仰がずにはいられません。「こういうわけで、私達もまた、この様におびただしい証人の群れに囲まれている以上、全ての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てましょう。そして、信仰の創始者または完成者であるイエスを見つめながら、我々に定められたレースを忍耐強く走り抜こうではありませんか。イエスは、御自身に約束された喜びの為に、十字架の刑を耐え忍び、恥をもいとわず、神の玉座の右にお座りになったのです。あなた方が、疲れ果てて心を見失わぬように、罪人達からのこれ程の反抗を耐え忍んだお方の事を考慮なさい。」（ヘブライ人への手紙１２章１～３節）

多くのキリスト教徒達は、無意識のうちに十字架に架けられた、亡くなったキリストを思い起こしがちです！御父の右手に座し、その顔は力で太陽の様に輝き、私達の心の痛み、苦悩、苦痛、痛みに耳を傾け、感じて下さり、御父に私達の代わりに執り成しをし、仲裁をして下さる、生ける救世主には人々の心は向いていません。そうです。イエス・キリストが現在も生きておられるという事実の為にこそ、私達は日々神を称えるべきなのです！

イエス・キリストは地上に戻られるのでしょうか？

神の国の良い知らせである福音の最も重要な点の一つは、キリストが再びお越しになるという事です！キリストは常にそう言われました！キリストは、横柄で独善的なパ

リサイ人に、アブラハム、イサク、ヤコブは神の国に入るが、彼らは拒否され、追放されるだろう、と言われました！

多くの人々は救われるのは「簡単だ」と信じています！ただ「心で信じ」、「自身の口で告白」さえすれば、イエス・キリストは「罪人を救うために亡くなられた」のだからあなたも救われる、と人々は言います。しかし、イエス・キリストは、救われる事はそんなに簡単な事ではないとはっきり言われました！

「すると、主よ、救われる者は少ないのでしょうか？と言う人がいた。イエスは一同に言われた。狭い（細い、困難な）戸口から入るように努めなさい。言っておくが、多くの者達が入りたくても入れない事と成ろう。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまった後、あなた方が外に立って戸を叩き、御主人様、開けて下さい、と言っても、お前達が何処の者か知らない、という答えが返ってくるだけである。その時、あなた方は、私達はあなたと飲食を共にしたし、あなたは私達に広場でお教え下さいました、と言うでしょう。しかし主人は、お前達が何処の者か知らぬ、不義を行う（法を守らない）者共よ、皆私の元から立ち去れ、と言うだろう。自分達は追放されたのに、アブラハム、イサク、ヤコブや全ての預言者達が神の国に入っているのを見て、あなた達は泣き喚いて歯ぎしりすることだろう。そして人々は、東西南北から来て、神の国で宴会の席に着くのです。」（ルカによる福音書１３章２３～２９節）

ご存知のように、聖書の中でも最も重要で有名なオリーブ山の予言は、神の力と栄光と共にキリストが地上に戻られる事が主要なテーマとなっています。「稲妻が東から西へ閃き渡る様に、人の子も来るからである」（マタイによる福音書２４章２７節）イエス・キリストはご自身の王国を建てる為に地上へ戻られる時について常に話されました！

短い人の一生の間に乗り越えた者達にイエスが与えられた約束に注目して下さい。「乗り越える者、そして、私の勤めを終わりまで守り続ける者に、私は諸国の民の上に立つ権威を授けよう。彼は鉄の杖をもって彼らを支配する、まるで土器を打ち砕く様に。同じように、私も父からその権威を受けたのである。」（ヨハネの黙示録２章２６，２７節）

イエスはオリーブ山の予言で幾度も弟子達にご自身の再来について述べられました。イエスは言われました。「その時、人の子の徴が天に現れる。そして、その時、地上の全ての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るだろう。人の子は、大きなラッパの音と共にその天使達を遣わす。天使達は、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人達を四方から呼び集める。」（マタイによる福音書２４章３０，３１節）

では、キリストが「この世に再来される」時は、何処に来られるのでしょうか？もちろん、地上です！数多くの預言者がこの根本的な真理を明言しています！キリストご自身も何度も繰り返し言われました！

イエス・キリストが天に上げられた時、天の使いから地上にもたらされた最初のメッセージによって、その事が再確認されました！「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれる時、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人が側に立って、言った。ガリラヤの人達、なぜ天を見上げて立っているのか？あなた方から離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなた方が見たのと同じ有様で、またおいでになる。」（使途言行録１章９～１１節）

キリストは何処に戻られるのでしょうか？ゼカリヤの預言に注目して下さい。「そして、主の戦う日、主は進み出て、これらの国々と交戦される。その日主は、エルサレムの東にあるオリーブ山に、その御足で降り立たれるだろう。オリーブ山は東と西に半分に裂け、非常に大きな谷が出来る。山の半分は北に退き、半分は南に退く。」（ゼカリヤ書１４章３，４節）

キリストが再来して地上に神の国を建てられる事に関する神の言葉については、数多くの預言があります。

イザヤは書きました。「終わりの日に、主の神殿の山は、他の山々の上に君臨し、どの峰よりも高くそびえよう。国々はこぞって大河の様にそこに向かうだろう。そして、多くの民が来て言うでしょう。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。されば、主は私達に道を示され、私達はその道を歩もう」と。主の法はシオンから出で、御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打

ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、戦を知る事はもう無いだろう。」（イザヤ書２章２～４節）

多くの人々が、死ぬと「魂」は直ちに天国へ行くと信じ込まされてきましたが、聖書では、キリストが「キリストを信じて死んだ人達」を最初に復活させ、再来の時に生き残っている者達は、復活した人達と共に（地上の大気の一部である）雲に包まれて引き上げられ、キリストと共に神の国で暮らす事になる、とはっきり書いています。人々は、地上からわずか数千フィート上空の、雲の中でキリストに会う為に昇りますが、彼らは、「その日」にオリーブ山の上に降りる為に、神の天使達によって運ばれるのです！（マタイによる福音書２４章３１節）

パウロは書きました。「つまり、アダムによって全ての人が死ぬ事になった様に、キリストによって全ての人が生かされる事になるのです。ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初に初穂であるキリスト、次いで、キリストが来られる時に、キリストに属している人達、次いで、世の終わりが来ます。その時、キリストは全ての支配、全ての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。キリストは全ての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配される事になっているからです。」（コリントの信徒への手紙１、２２～２５節）

テサロニケの人へパウロは書きました。「すなわち、大天使の声による合図と、神のラッパと共に、主御自身が天から降りて来られます。すると、キリストを信じて死んだ人達が、まず最初に復活し、それから、私達生き残っている者が、（地上の大気の一部である）空中で主と出会う為に、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、私達はいつまでも主と共にいる事になります。」（テサロニケ人への第一のへの手紙４章１６，１７節）では、主は何処にお越しに成るのでしょう？主は、エルサレムに魂の首都を建てる為に、この地上へ来られるのです！

ヨハネが幻で見た、イエス・キリストの再来の記述に注目して下さい。「そして、私は天が開かれるのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。その目は燃え盛る炎の様で、頭には多くの王冠があった。この方には、御自身以外は誰も知らない名が記されていた。また、血に染まった衣を身に纏っており、その名は「神の言葉」

と呼ばれた。そして、天の軍勢が白い馬に乗り、白く清い麻の布を纏ってこの方に従っていた。この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。そして、鉄の杖で彼らを治めるだろう。この方はぶどう酒の搾り桶を踏むが、これには全能の神の激しい怒りが込められている。この方の衣と腿のあたりには、**「王の中の王、主の中の主」**という名が記されていた。私はまた、一人の天使が太陽の中に立っているのを見た。この天使は、大声で叫び、空高く飛んでいる全ての鳥にこう言った。「さあ、大いなる神の宴に集まれ。王の肉、将軍の肉、権力者の肉を食べよ。また、馬とそれに乗る者の肉を食べよ。自由な者、奴隷である者、そして、その大小構わず、全ての人の肉を食べよ。」そして私は、あの獣と、地上の王達とその軍勢とが、馬に乗っている方とその軍勢と交戦する為に、集まっているのを見た。しかし、獣は捕らえられ、また、獣の前で啓示を行った偽預言者も、一緒に捕らえられた。この啓示によって、獣の刻印を受けた者や、獣の像を拝んでいた者どもは、惑わされていたのであった。獣と偽預言者の両者は、生きたまま硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。残りの者どもは、馬に乗っている方の口から出ている剣で殺され、全ての鳥は、彼らの肉を飽きるほど食べた。」（ヨハネの黙示録１９章１１～２１節）

イエス・キリストの再来をたった一時でも疑う人は、キリストご自身が何度も繰り返し言われた事を拒否する者であり、全ての預言の核心を拒否する者なのです！キリストが地上に戻られ、王の中の王、主の中の主として地上を治められる、という事ほど絶えず強調されてきたはありません！イエス・キリストがずっと以前に地上にもたらされた**良い知らせ**とは、**「現在の、私達の時代」**と近い将来の為なのです！それは、私達が迎えつつある、預言された大いなる艱難の時、世界の始まりからその時まで、かつてなかった程の艱難に満ちた時勢に関する最新のメッセージなのです。

ダニエルはこの時について、イエス・キリストご自身がされたように預言しました。大天使がダニエルに言いました。「その時、（終わりの時、ダニエル書１１章４０～４５節参照）、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。そして、苦難が訪れるだろう。国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかしその時、あの書に名が記されているお前の民全ては救われるだろう。そして、地の塵の中に眠る多くの者が目覚める。ある者は永遠の生命に、またある者は永久に続く恥と非難の的となる。」（ダニエル書１２章１、２節）

皆さんと私が聞きうる最高の知らせとは、イエス・キリストが人間の出来事に介入され、神の介入なくしては、男も女も子供さえ地上で生き残る事のないような、近い将来起こる狂気の悪魔的な戦争を止めて下さる事です！

ルカは、この様な酷い苦難が**起こり始めた**ら、人々は「頭を上げ」て、解放の日が近い事を知りなさい、と言ったキリストの励みとなる言葉について書きました。「それから、太陽と月と星に兆しが現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、人々は、恐怖と不安に陥り、この世界に何が起こるのかと怯え、恐ろしさのあまり気を失うだろう（多くの人が心臓発作で亡くなるでしょう！）。天体が揺り動かされるからである。その時、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。この様な事が起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなた方の解放の時が近いのだから。それから、イエスは例え話をされた。いちじくの木や、他の全ての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいた事がおのずと分かる。それと同じ様に、あなた方は、これらの事が起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。はっきり言っておく。これら全ての事象が起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない。気を付けなさい。さもなくば、あなた方は、酒に溺れ、泥酔し、そして、人生の煩い事によって、その心を重くし、その日が不意に罠の様にあなた方を襲う事になるだろう。その日は、地球上に住む者全てに襲いかかるからである。ですから、警戒を怠らず、起ころうとしているこれら全ての事から逃れて、人の子の前に立つ事が出来るように、常に祈りなさい。」（ルカによる福音書２１章２５～３６節）

もうお分かりのように、多くの人々が聞いた事のある、いわゆる「福音」とは、イエス・キリストが地上にもたらされ、弟子達に証として全世界へ伝えるよう託されたメッセージのごく一部にすぎません！イエス・キリストの素晴らしい良い知らせとは、人の出来事に介入される事、すなわち、鉄の杖で地上を「治める」為に戻られるという事でした！

現在の神の教会の勤めとは、この地球規模の素晴らしいメッセージを証として世界中にはっきり示す事です！多くの人がキリストのメッセージを信じる事を拒否し、悔い改める事や神の前で悔恨の印を示す洗礼を受ける事を拒否するだろうと、神は言われ

ています。しかし、耳を傾け、理解する人もいます。「良い土」に種を蒔く事を受け入れる事で、そこに根がはり、育つ人もいます。

皆さんは、神が召される者に成り得るでしょうか？皆さんは、全能の神がご自身の御業を手伝わせる者に成り得るでしょうか？神が、もはや説教や文書によって人々に訴えかける事をしない時が近づいています。人々の心に、全能の神の存在に対して、一欠けらの疑いも無くなる時が近づいています！もうすぐ、預言された艱難の時が訪れます。素晴らしい天の啓示が示される時、人の心に疑う余地は無くなるでしょう！もうすぐ・・・

―終―

この資料は、内容を改ざんせず、著者と出版社を明確にした上でなら、コピーして友人や家族に無料で配布する事が出来ます。一般大衆向けに出版する事は出来ません。

この出版物は個人的な探求の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の言葉をそのまま受け入れるのは賢明ではないという事を理解し、全ての事柄に関して、あなたはご自分で聖書に基づいて証を立てるようにして下さい。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱　７４７Flint、テキサス　７５７６２

電話番号：（９０３）５６１-７０７０　　Fax:（９０３）５６１-４１４１

なお当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

www.garnertedarmstrong.org/

ガーナーテッドアームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く、協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。